

# 第7回 「国際参加プロジェクト（インドネシア）」

## 報告書

The 7th "International Participation Project"



*in Indonesia 2007*



地域文化研究センター

International Center for Regional Studies

天理大学

Tenri University

## はじめに

第7回「国際参加プロジェクト(インドネシア)」は2007年7月21日～8月3日の間、昨年に続きインドネシア共和国スマトラ州メダン市とニアス島で行われました。今回のプロジェクトでは2005年3月に地震と津波で大きな被害を受けたニアス島の復興支援のため、小学生を中心とした防災教育とニアス島の人々との交流を目的としました。

本報告書はこのプロジェクトに参加した学生が中心となり活動の総まとめとして、準備から現地での活動、そして帰国後の足取りを記したものです。お手に取ってご覧になっていただければ、参加学生一同たいへんうれしく思います。

第7回「国際参加プロジェクト(インドネシア)」参加者一同



縁を喜び  
愛を伝える  
-Best Smile-





喜  
仁  
愛  
緣  
ki-en-den-ai

# 目次

はじめに .....	1
縁を喜び 愛を伝える —Best Smile— .....	2
目次 .....	4
第7回「国際参加プロジェクト (インドネシア)」報告書刊行に寄せて 学長 橋本 武人	
続・歴史を刻むということ 地域文化研究センター長 住原 則也	
第7回「国際参加プロジェクト (インドネシア)」報告書刊行に寄せて 後援会長 江川 嘉忠	
第7回「国際参加プロジェクト (インドネシア)」報告書刊行に寄せて 国際文化学部長 松尾 勇	
第7回「国際参加プロジェクト (インドネシア)」報告書刊行に寄せて 体育学部長 湯浅 晃	
自分にできることをボランティア活動、国際協力へ 言語教育研究センター 小林 早百合・吉田 智佳	
第7回「国際参加プロジェクト (インドネシア)」参加者一覧 .....	12

## 第Ⅰ部 活動報告 .....

活動の経緯 .....	14
派遣前・帰国後の研修日程 .....	15
【事前研修活動報告】 .....	16
防災教育の準備 .....	19
第7回「国際参加プロジェクト (インドネシア)」日程表 .....	23
【現地活動報告】 .....	24
防災教育を終えて・・・ .....	30
モアウォ小学校からの声 .....	32

## 第Ⅱ部 感想文 .....

e n～旅の途中～	柴原 陽介 (Yosuke Shibahara)	40
ドラマチック in インドネシア	花尾 義隆 (Yoshitaka Hanao)	42
胸に焼きついた熱い思い出	北 翔太 (Shota Kita)	44
サオハグルニアス (ありがとうニアス)	藤本 悠太 (Yuta Fujimoto)	46

めっちゃありがとうございます	矢持 善徳 (Yoshinori Yamochi)	47
ポジティブ思考の発見	西峰 葉子 (Yoko Nishimine)	49
こころの豊かさ	岡本 望穂 (Miho Okamoto)	51
NIAS2007！また絶対行く！！	渡邊 麻子 (Asako Watanabe)	53
インドネシアの温かさ！	中山 卓己 (Takumi Nakayama)	55
ニアス島の子どもたちにありがとう	東 祐作 (Yusaku Azuma)	57
TERIMA KASIH PULAU NIAS	菊池 文也 (Fumiya Kikuchi)	58
人と人のつながり	新井 真未 (Mami Arai)	60
知らない世界を見てみたい	平野 海 (Umi Hirano)	62
ティダ マウ プーラン	石田 賢人 (Kento Ishida)	64
My precious memories	井元 傑 (Suguru Inomoto)	67
参加することで得られたもの	前堀 友希 (Yuki Maebori)	69
記憶を書けない弁明	住原 則也 (Noriya Sumihara)	71
身近な国際交流で心を暖かく	澤山 利広 (Toshihiro Sawayama)	72
ニアスの子どもたちの心に何が残ったか？	菅原 由美 (Yumi Sugahara)	73
ふれあいを通して学ぶ	倉光 ミナ子 (Minako Kuramitsu)	74
伝えることの大切さ	中田 翔子 (Shoko Nakata)	75
ニアスの地に芽生えた「絆」	高藤 洋子 (Yoko Takafuji)	77

<b>第Ⅲ部 資料編</b>	79
Project Life	80
【インドネシアと地震】	82
【喜縁伝愛とは？】	83
【発見伝 in インドネシア】	84
【折り鶴】	86
【インドネシア語 一覧表】	88
【ニアス語 一覧表】	89
【第7回「国際参加プロジェクト」に関する新聞記事】	90
編集後記	92

## 第7回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」 報告書刊行に寄せて

学長 橋本 武人

天理大学の「国際参加プロジェクト」は、建学の精神の一環として唱導する「他者への献身」を国際的なスケールで実践し、よって本学の教育目標として掲げる宗教性と国際性を同時に涵養する教育課程である。

本プロジェクトは、2001年大震災に見舞われたインド西部地区への災害救援活動として始められた。これが3年間続けられた後、2004年にはフィリピンへ、2005年には中華人民共和国へと活動の舞台が移され、昨2006年と本2007年には、地震と津波により大きな被害を蒙ったインドネシアのニアス島を中心に、2年続きの活動が展開された。本書はその2007年度の活動報告書である。

もともと災害救援として始まったとはいえ、このプログラムは義援金や援助物資を運び届ける類いのものでない。最初のインドでは、貯水のための河川堰建設やボンガ（土囊のハウス）の建築など、現地の人々が自立復興へ向けて必要とするものを、ともに汗して建設するところに特色をもたせたもので、この基本姿勢は終始一貫している。

フィリピンでは恵まれない小学校の児童たちにリコーダーを贈呈して実際に演奏する技術を指導、中華人民共和国では砂漠化の危機に曝されている地域での植林活動に従事。インドネシアのニアス島においては、昨年は小学校の校舎を建築して寄贈するという事業を成し遂げ、本年は同じ島の小学生たちに地震や津波に対する防災教育を、インドネシア語で施すという新しい試みがなされた。

言葉も違えば習慣も異なる異文化圏の人々との共同作業、ホームステイ先の家族との直接的な交わりは、学生たちに国際間相互理解の深化を促し、国際的なスケールで展開される「他者への献身」は、人をたすける心という宗教的な心性の涵養を助長する。また、貧しくとも純真で屈託のない子どもたちとの交わりは、何かにつけて恵まれている自己自身を省みる機会となり、物質文明が置き去りにしてきた心の豊かさを取り戻す契機ともなる。

今はまだ渡航先も限られ、参加人員数にも制限があるが、おいおい活動の範囲を世界の各地に広げて、一人でも多くの学生諸君が参加できるようにしていきたい。終わりに、この度の国際参加プロジェクトの計画実施に携わった教職員の尽力、絶大なご支援ご協力を賜った関係機関各位のご厚情に対して、深甚なる敬意と謝意を表する次第である。

## 続・歴史を刻むということ

地域文化研究センター長 住原 則也

今年も「国際参加プロジェクト」に新しい歴史の1ページが加わることになりました。この記録文集が完成したことをもって、新しい1ページとなります。歴史を振り返れば、建学の精神を国際的な舞台上で、という方針から、新世紀が明けた2001年から開始され、インド（2001～2003）、フィリピン（2004）、中国（2005）、で実施され、昨年2006年は新たな飛躍の年となり、年2回体制（インドネシアとフィリピン）が開始されました。そして今年もインドネシアとフィリピンで実施されましたが、昨年とどちらも同じ場所でありながら、昨年とは違った活動が企画され、準備され（事前研修）、ほぼ予定通り現地で実行されました。多くの人々の心が寄り集まり一つとなった成果だと思われます。このプロジェクトは、三段跳びになぞらえてみるすることができます。まず2ヶ月以上にわたる事前準備・研修（ホップ）、2週間程度の現地活動（ステップ）、そして、じっくり時間をかけて作成する記録文集（ジャンプ）、の三段階です。ホップ前の助走段階では、当センターのスタッフが事前に2度3度と現地へ赴き、受け入れ先の学校やホームステイ先の人々と話し合いを重ねています。したがって、「ステップ」にあたる現地での活動だけが「国際参加プロジェクト」ではありません。それぞれの段階で学内外の多くの方々にご支援を受けることで、毎年全く新鮮な活動となっています。費やした時間と労力に相応しい心の財産が出来、この記録文集に凝縮されているものと考えます。

この文集は、関わった多くの人々への感謝の意味を込めたものであり、同時に、後輩の参考とするための新しい歴史の記録であり、かつ、活動に参加した人が、これを見るたびに記憶を新たに呼び起こすものです。すべての体験や心の歴史を限られた紙面に入れ込むことはできないので、この文書を見ることで、書ききれなかったことや、眠っていた記憶をも呼び覚ますきっかけにもなるものです。歴史は記録されることで新たな歴史の出発点になるものと考えます。

今年度のインドネシア・プロジェクトでは、昨年度（2006）学内の有志による「ニアス島等復興支援委員会」が中心となって大学から寄附した小学校校舎の教室で、防災教育を中心とした活動が行なわれました。白い壁の新しい校舎で、ニアス島の子どもたちが笑顔一杯で私たちを迎えてくれ、学生の活動に眼を輝かせていた様子を、この支援活動にご協力いただいたすべての方々に直接見ていただきたい思いにかられたのは、私一人では無いと思います。地震・津波被災地の被害の大きさに比べれば、まことにささやかな貢献かもしれませんが、将来、より大きな貢献につながる種が、活動に関わった一人一人の心に蒔かれたものと考えます。ニアス島現地の人々の思いも、「被災したことは不幸なことであつたけれども、そのことを通じて遠く日本の人々に知られ、心の交流が始まったことは何より嬉しい」というものでした。

次年度の活動に向けた準備はもう始まっています。



## 第7回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」 報告書刊行に寄せて

後援会長 江川 嘉忠

今年の日本の夏は例年にない猛暑となり、秋ごろまでおかしな気候が続いた。それと同じように、世界の至るところで自然災害が発生し、テレビでは山火事やサイクロンなどによる被害を伝えるニュースが流れている。世界の気象が少しずつ狂い始めているとしたら、これからも自然災害の被災地への援助というものは増加してくるかもしれない。天理大学地域文化研究センターが企画・運営している「国際参加プロジェクト」はそのような被災地で活動が続けてきたという。今年の夏には第7回のインドネシア、第8回のフィリピンとプロジェクトが行なわれたが、そのうちのインドネシアのプロジェクトは、昨年の活動を継続したものであるという。活動の地であるニアス島は2004年の年末に発生したスマトラ沖大地震の後に、大きな地震で被害を受け、他の地域ほど援助の手が届かなかったところである。日本において、スマトラ沖大津波の被災地への関心さえも薄れていく中で、そのようなところへの継続的な支援は非常に意義のあることに違いない。

今年のプロジェクトでは、学生たちがニアス島の小学生に対して防災教育を行なったという。スマトラ沖大津波の折、インドネシアでは地震の後に津波がくることを知らなかった人も多く、そのために被害も増えてしまったと聞いたことがある。地震大国である日本では小学校から避難訓練が行なわれているが、それでもいざ地震が起こるときちゃんと対処することは難しい。とはいえ、インドネシアでも地震が増えていると聞くので、地震に対する知識を小さい頃から身につけていくことは現地の人びとにとっても大変役に立つこととなるだろう。

昨年の活動では参加学生たちはインドネシア人の家庭でのホームステイを通して多くのことを学んだと聞いている。今年もニアス島へ赴き、防災教育の活動やインドネシアの人びととの交流を通して、きっと、個人個人に感じ入ることがあったに違いない。大学の4年間という短い間に、海外へ出かけ、さらにボランティアのような活動をするのは、きっと学生の長い人生において意味のある経験になることであろう。これからも天理大学の学生たちがこのような機会を得られるよう、後援会としてもできる限り支援をしていきたいと願っている。

## 第7回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」 報告書刊行に寄せて

国際文化学部長 松尾 勇

まずは今夏実施されました第7回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」ならびに第8回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」が大きな成果を挙げて無事終了いたしましたことはこの上ない喜びです。また、本年度も、両プロジェクト推進のための研修の企画・実施や参加者への指導に直接ご尽力くださいました教職員の方々には深甚なる謝意を表したいと存じます。

今年のインドネシアのプロジェクトは、昨年同様に、2004年のスマトラ沖大津波の後、大きな地震に見舞われたニアス島で行なわれました。全学あげての募金活動の結果、ニアス島モアウォ小学校に校舎を一棟寄贈できたことはその支援活動の中心を担ってきた国際文化学部にとっては非常に喜ばしいことでした。そして、その小学校およびコミュニティの方々との交流がこのように続いているということは大変素晴らしいことと思います。さて、今年のプロジェクトの活動はモアウォ小学生を対象とした防災教育であったと伺っております。インドネシアに限らず、自然の猛威による災害は年々増えているようであり、そのような中で予防に努める教育を行なっていくことは意義のあることでしょう。また、学生たちもこのような防災に関するプロジェクトに参加することで、国際協力や国際貢献に関する意識だけでなく、まさに人が生きるということを学ぶ非常によい機会になったのではないかと思います。

今年は新たな試みとして、本学部のアジア学科インドネシア語コースの海外文化実習と共催という形でプロジェクトが企画されました。インドネシア語コースの学生たちはこれまでとは様相の異なる文化実習に参加したことで、いろいろと戸惑うこともあったと思います。しかし、インドネシアという広い国において、首都のあるジャワ島だけでなく、スマトラ島とニアス島も訪問できたことは、皆さんのインドネシア語を学ぶ意義を再確認しインドネシアへの関心を高める貴重な体験になったのではないかと拝察いたします。このような言語コースとの連携に基づいて行われます「国際参加プロジェクト」のあり方は、本学部を中心に取り組もうとしております国際協力に関する教育のより一層の推進につながることを期待します。

## 第7回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」 報告書刊行に寄せて

体育学部長 湯浅 晃

地域文化研究センターが企画・実施されましたインドネシアならびにフィリピンへの2回の「国際参加プロジェクト」が、今年度も成功裡の内に無事終えられましたことを、先ずもってお祝い申し上げますとともに、センターの継続的な活動に対しまして敬意を表します。参加した学生たちも、異国の地で文化の違いを乗り越えながら生活し、インドネシアとフィリピンの人びとのために汗を流すことによって、本学の最も重要な教育目標である「他者への献身」を心の核とした「天理スピリット」の体得をなしえてきたのではないかと思います。

今回のプロジェクトは、インドネシアでは昨年引き続き地震災害の復興支援として小学生たちに防災教育をすること、またフィリピンでは国内においてリコーダーを集め、それを小学生たちに教えることといった教育が主な活動内容であったと聞いております。また、双方のプロジェクトにおいて、今年は体育学部の学生が参加したという喜ばしい報告を受けました。これまで、体育学部の学生はあまりこのプロジェクトに参加することがなく残念に思っておりました。しかし、今年度のプロジェクトでは、学生のリーダーを務めたり、日本文化の一部として空手の形を演じたりと、プロジェクトの活動だけではなく、体育学部で培った経験に基づいた活動もしてきてくれたのではないかとうれしく思います。他の大学ではスポーツや武道を介した国際交流・協力の教育プログラムが有効に機能していると聞きます。これからも、体育学部の学生たちには、自分たちが慣れ親しんできたスポーツをするだけでなく、そのスポーツを海外の子どもたちに教えていく、あるいはスポーツをする楽しさを共有していくことにより、新たな自己を発見し、「天理スピリット」を内外へ広めていっていただければと思います。そして、本学においても、地域文化研究センターと体育学部との協力により、そのような機会を増やしていけたらと願っております。

国際参加プロジェクトは「他者への献身」の心を核とした「天理スピリット」の体得の大切さを内外へアピールしていく意義のある教育プログラムであるといえます。全学的に大学改革を模索している今、〈他者への献身—人間理解—国際協調—スポーツ〉を貫く、学部の枠を越えた本学独自のプログラムやプロジェクトが是非とも必要であると考えています。

## 自分にできることをボランティア活動、国際協力へ

言語教育研究センター 小林 早百合・吉田 智佳

「国際協力」、「ボランティア活動」—なんて聞くと、「大変そう」とか「私には無理」とか「そんな余裕ない」なんて思われる方がおられるかもしれません。確かに、海外に出かけて行ってボランティア活動をするに対しては、時間的な問題、事前準備など、さまざまなことを考えると不安もあるでしょう。だからといって、「ボランティア活動をしなさい」、「国際協力ができない」という結論にはなりません。身近なところを見渡してみてもいかがでしょうか？ここでは、ちょっとした自分の関心事が国際協力につながったお話をご紹介します。

天理大学には「まなび一た」という異文化交流をはかる場があります。普段の活動は留学生に日本語や日本の文化について教えることです。その代わりに、留学生も日本人学生に自分の国の言語や、文化、慣習について教えます。もちろん、「ボランティア」活動です。お互いに知りたいことを教えあったりするわけですから、どちらにも負担にはなりません。母国の異なる者同士が教えあうのですから、これも小さな「国際」協力です。

昨年(2006年)のこと、「まなび一た」の活動に参加しているメンバーが、ある日、「大学祭で、模擬店とか、バザーとか、何かみんなで一緒にやろうよ」と言い出しました。「売り上げはどっかに寄付しよう！」と。大学祭では、みんな頑張ったのですが、経費を差し引くと、収益は4000円くらい…。でも、「気持ちだけは贈りたい」とインドネシアの子どもたちのために使っていただくことにしました。今年(2007年)は、昨年の屈辱(?)を晴らすため、学内でチャリティバザーを行ないました。商品はちりめんのマグネットと、フェルトのアクセサリ類。もちろん、「まなび一た」メンバーの手作りです。慣れない手つきで紐を結んだり、ボンドをつけたり、ラッピングをしたり…。今回も一生懸命頑張りました。ご協力いただいた皆様のおかげで、今年は44,068円の収益です。そのお金と思いを地域文化研究センター(住原則也センター長)に託し、インドネシアとフィリピンの子どもたちのためにお使いいただきます。

最初は自分が学んでいる言語を使ってコミュニケーションをとりたい。そんな自分の関心事から始めた活動です。それが留学生と語り合ううちに、視野が広がり、人のために何かしたくなった。最初から、「ボランティア活動をしよう」、「国際協力をしよう」と意気込んでいたわけではありません。ただ、自分が置かれた環境で、それぞれが、「今の自分に何かできることはないかなあ」と考えただけなのです。人間一人の思い、力では大したことはできません。しかし、二人、三人…と思いを同じくする者が集まれば、その分だけ大きな思い、力となることを私たち自身も「まなび一た」活動を通じて感じています。

「大変そう」とか、「私には無理」とか、「そんな余裕ない」なんて思わないで、「今、自分が置かれた環境で、無理なく、できることはないか？」を考えてみてください。得意なこと、好きなことがあれば、それを生かして「誰かのために何かできないかな？」と辺りを見回してください。あなたの温かい思いを待っている人がきっといます。

# 第7回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」

## 参加者一覧

### ■スタッフ

- |           |   |
|-----------|---|
| 1. 住原 則也  | 地域文化研究センター長                               |
| 2. 澤山 利広  | 地域文化研究センター准教授                             |
| 3. 倉光 ミナ子 | 地域文化研究センター専任講師                            |
| 4. 菅原 由美  | 国際文化学部専任講師、地域文化研究センター兼任研究員                |
| 5. 中田 翔子  | 国際文化学部アジア学科<br>タイ語・インドネシア語コース事務助手（現地指導補助） |

### ■学生

- |           |                                       |
|-----------|---------------------------------------|
| 1. 東 祐作   | 国際文化学部アジア学科インドネシア語コース2年               |
| 2. 新井 真未  | 国際文化学部アジア学科1年                         |
| 3. 石田 賢人  | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科1年                  |
| 4. 井元 傑   | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科1年                  |
| 5. 岡本 望穂  | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース3年            |
| 6. 菊池 文也  | 国際文化学部アジア学科インドネシア語コース2年               |
| 7. 北 翔太   | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科<br>ブラジルポルトガル語コース4年 |
| 8. 柴原 陽介  | 体育学部体育学科スポーツ学コース4年（リーダー）              |
| 9. 中山 卓己  | 人間学部宗教学科2年                            |
| 10. 西峰 葉子 | 国際文化学部アジア学科タイ語コース3年                   |
| 11. 花尾 義隆 | 体育学部体育学科スポーツ学コース4年                    |
| 12. 平野 海  | 国際文化学部アジア学科1年                         |
| 13. 藤本 悠太 | 国際文化学部アジア学科インドネシア語コース4年               |
| 14. 前堀 友希 | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英1年                 |
| 15. 矢持 善徳 | 人間学部宗教学科3年                            |
| 16. 渡邊 麻子 | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース3年            |

### \*防災教育における担当

地震・津波のしくみを教える班：東、岡本、中山、平野、藤本、矢持

避難の仕方を教える班：新井、石田、井元、菊池、北、柴原、西峰、花尾、前堀、渡邊

第 I 部  
**《活動報告》**

## 活動の経緯

天理大学では、2004年12月26日と2005年3月28日にインドネシア共和国・スマトラ島周辺で発生した地震と津波の被害に対して、支援活動が行なわれました。私たちの「国際参加プロジェクト」も引きつづき、その支援先を活動の地として実施しました。

### **【活動経緯】**

---

---

2004年	12月26日	スマトラ沖大地震によるインド洋大津波発生
2005年	1月	国際文化学部アジア学科タイ語コース・インドネシア語コースの学生等による街頭募金開始
	3月28日	ニアス島大地震発生
	10月6日	天理大学ニアス島等復興支援委員会発足 これ以降、天理大学ふるさと会をはじめ学内外の団体の協力を得て街頭募金活動を展開
	12月末	地域文化研究センタースタッフによるメダン・ニアス島の視察 これにより、プロジェクトに実施を決定
2006年	3月末	第6回「国際参加プロジェクト」(以下、プロジェクト)募集開始
	5月23日	ニアス島等復興支援委員会にて、ニアス島モアウォ小学校の校舎建設着工決定
	8月20日	インドネシアにて第6回プロジェクトの実施(～8月31日)
2007年	4月	第7回「国際参加プロジェクト(インドネシア)」募集開始
	5月8日	プロジェクト参加者募集締め切り
	5月15日	プロジェクト事前研修開始
	6月2日	奈良国立曽爾青少年自然の家での宿泊研修(～3日)
	7月20日	プロジェクト結団式
	7月21日	インドネシアにて第7回プロジェクトの実施(～8月3日)
	9月25日	帰国後研修開始

---

---

第I部では、2007年5月15日以降の私たちの活動にそって、その内容を紹介します。

## 派遣前・帰国後の研修日程

### ■事前研修

- 5月15日(火)                    オリエンテーション  
   センター長挨拶  
   プロジェクトに向けての健康管理の説明
- 5月19日(土)                    京都大学の防災教育の会 (KIDS) による研修
- 5月22日(火)                    インドネシアについての概説・インドネシア語1
- 5月29日(火)                    防災教育の準備  
   報告書作成に関する打ち合わせ
- 6月2日(土)  
    ~ 3日(日)                    宿泊研修  
   (国立曾爾青少年自然の家)
- 6月5日(火)                    斉藤容子氏(本学OG)による防災教育に関する研修
- \*\*\* 防災教育の準備・練習 \*\*\*
- 7月20日(金)                    結団式  
   最終打ち合わせ

### ■事後研修

- 9月25日(火)                    報告書作成に向けての打ち合わせ  
   個人感想文提出、写真の交換
- 10月9日(火)                    報告書の編集作業開始



## 【事前研修活動報告】

### 歩み出し

事前研修の初日には、地域文化研究センター長である住原先生からプロジェクトに向かう心構えについてのお話がありました。先生はプロジェクト発足の経緯や「HOP STEP JUMP」という3段階の活動プロセスを説明されました。また健康管理センターの大森さんからは、活動中の健康管理や活動後の健康報告の仕方について説明がありました。それから、メンバーの初



めての自己紹介がありました。みんなすごく静かで少しばかり緊張していました。こうして、活動の始まりを実感しつつ、不安と期待と興奮で胸を膨らませていました。その1週間後、インドネシア語コースの菅原先生から、インドネシアの地理や人口、宗教、生活習慣などの概要とインドネシア語の発音について講義を受けました。全員真剣な面持ちで講義を聴き、少しでもインドネシアの事を知ろうと勉強に励みました。

### KIDSによる防災教育研修



第7回プロジェクトの目的である「防災教育」のための研修は、京都大学のKIDS (Kyoto university Institution of Disaster prevention School) の皆さんのデモンストレーションをみることから始まりました。京都大学のKIDSとは学生による防災教育の会で、「未来を担う子供たち (KIDS) に災害や防災に関する知識を身につけてもらいたい、その知識をさらに次の子供たち (KIDS) へと受け継いでいってもらおう。このようにして、災害に関する知識のバトンを途絶えさせぬようにする」といった目的のもと、主に小学生を対象として災害や防災に関する知識を伝える活動をインドネシアのバンダアチェの小学校や日本国内各地の小学校で行なっています (<http://kuoedp.run.butobi.net/index2.html> から引用)。

デモンストレーションを見せて頂いたことで防災教育をどのようにすすめるのか、どんなものを使ったらよいのか、具体的な流れが分かりました。KIDSの皆さんの教材はインドネシアの子どもたちの大好きなドラえもんが主人公になっていたり、クイズを取り入れたりと、阪神淡路大震災の写真を使用したりと、子どもたちに地震について知ってもらうため

にたくさんの工夫がされていました。劇の後では教材の作成の仕方なども拝見させて頂き、とても参考になりました。

KIDSの皆さんの防災教育を見せて頂いたおかげで、今後何をすればよいのか大まかにわかりました。KIDSの皆さん、本当にありがとうございました。

## 曾爾高原での事前研修

6月2(土)～3(日)に「国立曾爾青少年自然の家」で宿泊研修を行いました。天理大学研究棟前から安藤教育支援部長が運転するバスで出発し、約1時間後に自然の家の駐車場に到着しました。それから、施設まで長い登り坂を歩くことになり、やっと登りきると、目の前には壮大な曾爾高原の大草原が広がっていました。到着後、すぐに入所式を行ないました。そのときに、天理大学出身の職員の方が出迎えてくださいました。それから、とりあえず荷物を宿泊棟に置いて、さっそく活動開始です!!!

### 《1日目の活動》

まず、インドネシア語の勉強をしました。菅原先生の指導の下、インドネシアからの短期留学生のデッタとアンギに、挨拶の仕方、数字、日常会話や発音を教えてもらいました。現地での生活では、ここでの勉強が最低限必要なものであり、また大きく役立つこととなりました。

そして、インドネシア語の勉強を終えてから少し休憩を挟んで、その後、避難の仕方を教える「避難班」と地震・津波のメカニズムを教える「しくみ班」に分かれて、防災教育の教材作成に取りかかりました。主な作業として劇で使う背景の絵を下書きしたり、劇の台詞についての案を出し合ったりしました。一人で黙々と作業をしている人もいれば、数人



で集まって議論をしている人たちもいて、それぞれの持ち味が交わりだした時間でした。やはり何も無いところから生み出していく作業はまさに手探りそのものであり、慎重なスタートでした。

作業後入浴まで少し時間があつたので、数名は曾爾高原を一望できる所まで登りました。思っていたとおり、道のりは長く、傾斜もところどころで厳しかったです。しかし、上から見る景色や、降りる時の夕焼けは言葉にできないくらい綺麗でした。

入浴・夕食の後、19時からは、教材作成の続きを行ない、ここでいくつかの絵が完成しました。絵の具が服や床につくほどまでに取り組み、それぞれ思い思いのものができ上がってきているように感じました。宿泊棟に戻ったあとも、スポーツ班と折り紙班に分かれ、交流活動についての打ち合わせを続けました。その後に、インドネシアで披露する出し物をいくつか考えました。

## 《2日目の活動》

2日目は朝6時に起床、そして、部屋の清掃を行ないました。「朝のつどい」では職員の方による、誕生日ごとにグループをつくる催し物があり、それをきっかけに他の宿泊者の皆さんとの小さな出逢いがありました。9時から、「アクティビティ」の時間



となり、天気が優れなかったので、施設内で3班に分かれてオリエンテーリングをしました。それは思っていた以上に早く終わったので、教材作成の続きをしました。

その後、昼食を取り、13時から退所式をしました。それから迎えのバスに乗り込み、大学へ帰りました。帰りのバスは行きと違い、皆疲れたようで睡眠をとる人が多かったです。大学に着くと、リーダーや副リーダー、それぞれの活動班のリーダーを決めて、解散となり、宿泊研修は無事に終わりました。

この宿泊研修でメンバーの皆の仲はよりいっそう深まり、また防災教育のための教材作成も本格的に始まりました。退所の際には天理大学出身の職員の方から「曾爾高原はススキが綺麗だから、また泊まりにおいで」と言ってくださいました。いつかまたこのメンバーでススキを見に行けたらいいなと思います。この時は「ただの研修」という風に思いましたが、後で振り返ってみれば、ここでの活動のすべてが現地ではとてつもなく“大きなもの”として形になりました。



# 防災教育の準備

## 《ねらい》

■地震・津波のしくみを教える班（「しくみ班」）：しくみ班は地震・津波はどのような仕組みで起こるのか、地球の内部はどのようになっているのかという点を教えることを目的としました。専門的な難しい内容を子どもたちが楽しく学べるように、インドネシアでも子どもたちに人気があるドラえもん、ドラゴンボール、ポケットモンスターなどに出てくるキャラクターのコスチュームを着て、そのキャラクターたちが子どもたちに教えるという形をとりました。

■地震が起こったときの対処法を教える班（「避難班」）：避難班は学校や自宅にいるときに、地震が起こったらいかに対処するのかという点を教えることを目的としました。防災教育の対象が小学生ということもあり、口だけで説明するのではなく、理解してもらいやすいようにインドネシア語で寸劇を含めることにしました。また、私たちが一方的に説明をするのではなく、劇の間にクイズを入れて子どもたちに答えてもらったり、大事なポイントを復唱してもらったりするという参加方式とすることにしました。

生徒4	わー。地震だ！！	Ahhhhh, ada gempa!!!
全員	あわてる！	
生徒3	机の上のものを押さえようとする	
生徒2	窓ガラスを押さえようとする	
クイズ		
ナレーター	さあ、こんなときはどうすればいいでしょうか。	Kalau hal seperti itu terjadi apa yang sebaiknya harus kita lakukan?
	1. 机のものをおさえる	1. Barang-barang yang ada di atas meja dipegangi.
	2. 机の下にかくれる	2. Berlindung di bawah meja
	わかるかな？	Jawaban apa yang paling tepat?
ナレーター	なぜ、机の下に隠れないとダメなのかな？	Kenapa kita harus berlindung di bawah meja?
	子どもの答え	
	揺れている状態、生徒は混乱	
先生	机の下にもぐれ	Semuanya berlindung di bawah meja.
生徒	(もぐる)	
先生	ゆれがおさまるまで、待つんだ。	Tunggu sampai gempanya berhenti.
ナレーター	みんな、わかったかな。地震がきたら、まずは頭を守るんだ。そのために、机の下に隠れるんだね。みんな、言ってみよう。	Adik-adik mengerti kan? Jadi, kalau gempa terjadi hal pertama yang harus dilakukan adalah melindungi di bawah meja. Ayo, sekarang kita coba ucapkan bersama-sama.
皆で復唱	「地震が起きたら、頭を守る」	"Jika gempa terjadi lindungi kepala."

避難班の劇台本の一部



クイズ部分の絵



台本の復唱部分

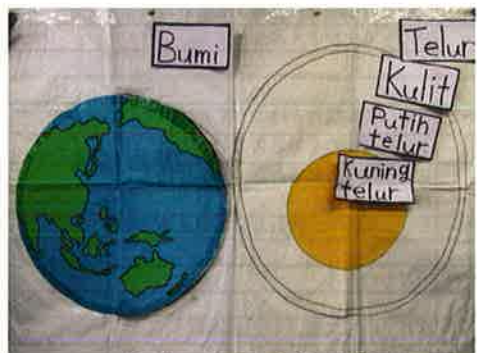
## 《台本と教材の作成》

まず、日本語で劇の台本を考え、それをインドネシア語コースの菅原先生の指導の下でインドネシア語に訳していきました。あまり慣れ親しんでいないインドネシア語での劇なので、台詞を覚えやすくする為に、いかに文を簡潔にまとめるのかとか、いかに専門用語を解りやすく説明できるかという点に最も苦労しました。台本作成と同時に劇で使用するもの（背景、クイズの絵や復唱用の紙）の作成にも取り組みました。製作時での良かった点は、賑やかな雰囲気協力しながら活動することができたこと、反省すべき点は製作スピードが遅かったために、完成するのに時間がかかり過ぎたことです。

## 《練習風景》

■しくみ班：初めのうちは、役割分担などが順調に決まっていたのですが、なかなか人が集まらず、打ち合わせが進まないといった問題がでてきました。また、みんな初めてのインドネシア語に悪戦苦闘の日々を送りました。研修時間中に十分な練習ができなかったのので、最後には天理教の詰め所を借りて、休日に泊まり込みで劇の練習をしました。

■避難班：さらに、学校にいる時に地震が起こった時の対処の仕方（「学校班」）と家にいるときの対処の仕方（「家班」）の2つのグループに分かれて、準備をしました。第1段階では、学校班と家班に分かれて台本を読み合わせ、台詞を覚えていくということの繰り返しでした。初めてのインドネシア語でありながら、現地の人に正確に伝えるために、イントネーションを常に意識した練習を行ないました。第2段階では劇全体をスムーズに演じるための練習をしました。この時点では、声の大きさ、作成したクイズを使用するタイミング、現地の子どもたちに劇を飽きずに楽しんで見てもらうための方法など、細かな所を意識しました。



地球のしくみを卵に例えている絵

係悟空	まずはおれたちがみんなに地震の仕組みを教えてあげるよ！	Aku Ingnl mencertitakan pada teman-teman kenapa gempa terjadi.
仙人	まずはこれが何かわかるかな？（現地の子供に聞く）そう！地球だね！	Apakah kalian tahu ini apa? .....Betul, ini kan bumi.
少年 A	地震の仕組みを知るためにはまずは地球の中身について知ろう！	Supaya mengenal bagaimana gempa terjadi, kita harus mengenal pula tentang bumi.
係悟空	じゃあ卵と地球を比べてみようか。	Kita bandingkan telur dengan bumi.
ドラえもん	卵の中には黄身と白身があるよ。	Di dalam telur ada kuning dan putih telur.
ナレーター	でも地球の中はわからないよね。	Tapi kalau ini dalam bumi belum tahu kan?
係悟空	これを見て！みんなカメハメハって知ってるよね？今からおらがこの地球と卵をわるために、みんなでカメハメハを言ってくれるな？いくよー！せーのっ	Lihat ini! Apakah kalian tahu Kamehameha? Sekarang saya akan membelah bumi dan telur. Semuanya bilang Kamehameha ya? Satu-dua-tiga-
みんな	カメハメハーっ！！	Kamehamehaaaaaaaa!!!
係悟空	ありがとう！助かったよ。	Terima kasih!
仙人	地球は卵ににているよね。	Bumi mlrlp dengan telur, kan?
少年 A	地球も卵の白身と黄身みたいに、中身がわかれてるんだ。	Di dalam bumi juga ada dua bagian seperti kuning telur dan putih telur.
仙人	卵で言う殻の部分が、プレート、	Bagian dari kulit telur disebut "Lempeng" atau lapisan bawah bumi.
少年 A	白身の部分が、マントル、	Bagian dari putih telur disebut "selubung" atau Mentel.
仙人	黄身の部分が、核って言うんだ。	Dan, bagian dari kuning telur disebut "Inti" atau bagian tengah.
吾空	おれたちは気づかないけど、この自身の部分、地球でいうマントルが、地面の奥でゆっくりうごいてるんだ。	Walaupun tidak kita sadari, "Selubung", bagian dari putih telur ini bergerak perlahan-lahan di bawah permukaan bumi.
ドラえもん	ええー！！地球の中身が動いてるの！？	Ehhhhh!! Bagian dalam bumi bergerak?
係悟空	そうだよ。中身が動いているから、プレートも一緒にゆっくり動いているんだ。	Ya. Bagian dalam bumi bergerak maka "Lempeng", bagian dari kulit telur juga bergerak bersamaan dengan perlahan-lahan.

しくみ班の劇台本の一部

## 齊藤容子さんによる災害に関する研修

本学卒業生で、第1回「国際参加プロジェクト」の参加者でもある齊藤容子さんが、私たちのために、災害や海外での活動における注意点などを教えてくださいました。齊藤さんは現在、神戸にある国連地域開発センターで災害マネジメントの専門家として働いています。

### 《災害に関して》

「災害」という言葉の意味は日本と世界で異なっているようで、日本では地震や津波などの自然災害を指しますが、世界ではコミュニティの中で対応しきれなくなったものを意味するそうです。海外ではちょっとした地震でも家などの倒壊によって亡くなることが多いなど、地震の後の被害の起こり方も違います。また、海外で活動する前に日本のことを知っておくことも必要です。例えば、阪神淡路大震災のときには日本もインドネシアから木材の提供といった援助を受けていること、80%の人がレスキュー隊などの専門家に助けられるより、近所の方や知り合いなどのコミュニティによって助けられていたという事実などです。津波については、例えば、津波は一回では終わらないこと、沖の方に出ている漁師は気づかないこともあることなどの知識も必要だそうです。津波の被害はすさまじく、何も残さない、その現状には本当に言葉を失うことが多いということでした。

地震が起こった後の流れは、だいたい①災害が起こる→②レスキュー／ファーストエイドトレーニング→③復興計画(よりよい社会へ)→④日常の中における災害対策活動というサイクルになっています。このうち、最後の日常における災害対策活動こそが防災活動だということでした。それは単に避難の仕方や地震のしくみを学ぶだけでなく、実際に起こったことを基にして考えることも必要とします。例えば、津波によって海や浜にあるゴミと一緒に流されて、それに当たって亡くなった人もいたので、ゴミ拾いなどの環境面を見直す活動をしたり、ココナツの木に登れた男性が津波から難を逃れることができたので、木を植える活動をしたりすることです。このように、考えるべき側面をいろいろな角度から見るといろいろな方向性が生み出されるそうです。「災害を止めることは不可能だが、防災活動により被害の軽減はできる」というのが印象的な教訓でした。

### 《海外の活動について》

齊藤さんは海外の活動から、①「健康であること」：精神的にやられることも多々あるので、特に気をつけなければならない、②「笑顔でいる」：自分は部外者であり学ばせてもらっているということ忘れない、そして③「自分と向き合うことになる」：実際に何ができるのだろうという葛藤が生まれることを学んだと話されました。実際に何ができると考えると悩ましいが、「こんなことがあった」ということを周りの人や先進国に伝えることはできるそうです。活動では知識だけではなく、経験が大切といいました。国際協力の職では、自分は主役ではないということをついも気にかけておくべきも大切だそうです。

齊藤さんのお話から、大学時代の生活に関するものも含めいろいろなことが学べました。

## 天理小学校での模擬授業

私たちは天理小学校でこれまでの練習の成果を発揮するために、日本語で初の防災教育を行ないました。しくみ班は4年生、避難班は1年生のクラスで模擬授業をしました。どちらの授業も真剣に聞いてくれて、よい経験になりました。授業の流れを把握するといった改善点も分かりました。練習会の最後には、私たちの劇を観て下さった天理小学校の校長先生から「子どもたちにしっかり伝えるためには、ゆっくりしゃべらないといけない」というありがたいご助言を頂きました。インドネシアでの本番を迎える前に小学生の前で一度披露することができ、良い刺激を与えて頂きました。天理小学校の先生方そして小学校の皆さん、本当にありがとうございました。



## 結団式

明日からいよいよインドネシアです。結団式では一段と心が引きしまりました。学長先生からは「勇み、勇ます」というお言葉を頂きました。住原先生は「悩むときは原点に戻って考えなおすことも一つの手段であり、そして今までの日々が努力の日々で、明日からはその日々積み重ねた努力の実践をする日である」と温かく激励して下さいました。プロジェクトメンバーは「先生方からいただいた言葉を心に刻んでプロジェクトに望みたい」、「自分は、地震の被害者の経験があるので今回の活動で過去の経験を生かしたい」、「喜縁伝愛の言葉を頭にいれて活動していきたい」等、それぞれに決意を新たにしました。



# 第7回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」

## 日程表

7月21日（土）	関西国際空港集合 マレーシア航空にてクアラルンプールへ
7月22日（日）	クアラルンプールよりインドネシア・メダンへ 在メダン日本総領事館表敬訪問 スンガイ・アイル・ヒドゥップ孤児院訪問
7月23日（月）	スワダヤ大学日本語学科訪問 文化交流 北スマトラ大学文学部訪問 防災教育デモンストレーション
7月24日（火）	メダンよりニアス島・グヌンシトリへ モアウォ小学校にてホストファミリーとの顔合わせ
7月25日（水）	モアウォ小学校での活動開始 5・6年生対象に防災教育と避難訓練
7月26日（木）	モアウォ小学校活動 2日目 3・4年生対象に防災教育と避難訓練
7月27日（金）	モアウォ小学校活動 最終日 日本文化紹介 3～6年生全員による避難訓練
7月28日（土）	サエヴェ小学校訪問 3・4年生を対象に防災教育と絵画の交換
7月29日（日）	キリスト教の礼拝に参加 モアウォ小学校にてお別れ会
7月30日（月）	ニアス島よりメダンへ戻る メダンにて休憩
7月31日（火）	ブリヂストン工場の見学
8月1日（水）	トバ湖・サモシール島の見学 ブラスタギ市へ
8月2日（木）	メダンよりクアラルンプールへ
8月3日（金）	関西国際空港到着 解散



## 【現地活動報告】

### 在メダン日本国総領事公邸表敬訪問

関西国際空港を飛び立った後、マレーシアのクアラルンプールを経由して、インドネシアのメダンの地に降り立ちました。到着後、すぐに在メダン日本総領事公邸を表敬訪問しました。城田総領事は着任直後にもかかわらず、私たちを快く迎えてくださり、これからの活動に対して、「インドネシアはとても親しみやすい国です。特にニアスは都会ではないので、本当の心と心が伝わる友達をつくり、本当の心と心がつながる活動をして下さい。私たちは全力でサポートします」とのお言葉を頂きました。次に、学生リーダーの柴原君が活動内容や参加した経緯を説明した後、「言葉の壁を乗り越え、心と心



が交えるような活動にしたいと思います。リーダーですが、初海外で不安もいっぱいですが、でも皆で協力し、一つになって頑張ります」と、このプロジェクトにかける思いを語りました。最後に南葉副領事から、「メダンはスマトラ島最大の都市で、バタック人や中国系の人が多いところですが、また、インドネシアでは左手で物を渡すことや頭を撫でること、公共の場で酒を飲むことは避けた方がいいと思います。最近では、鳥インフルエンザの問題もありますので、鶏には気をつけて下さい」というインドネシアの日常生活についてのお話がありました。

その後、それぞれのテーブルに領事館の方が一人ずつ来て下さり、歓談が始まりました。青山首席領事は、スマトラ沖地震発生後すぐに現地入りされたそうですが、津波は地震や火事よりも怖く、何もかも奪い去っていくものだと実感されたそうです。また、ニアス島についても「皆さんの行くニアスは意外とキリスト教が多いので、豚肉も普通に食卓に出たりしました。年配の方の中にはニアス語しか話せない人もいて、ニアス語はインドネシア語と全く違うものなのでインドネシア語が通じなかったこともありました」と教えて下さいました。

最後に、閉会の言葉として青山首席領事から、「ニアスは北スマトラ州の一つの県で、地元魂のようなものがあり、文化的には自分たちはニアス人であるという考えをもちます。本当に自然が豊かなところで、夜は星空がきれいです。来年、インドネシアと日本は国交 50 年を迎えますので、来年もぜひ来て下さい。とにかく体には気をつけて、無理はしないで下さい」というお言葉を頂きました。

在メダン総領事館の皆様、お忙しい中、お時間を割いて頂きまして、本当にありがとうございました。



## スンガイ・アイル・ヒドゥップ孤児院

昼食を終えた後、次に私たちが向かった場所はスンガイ・アイル・ヒドゥップ孤児院（以下、孤児院）です。到着すると、すぐに孤児院の子どもたちが踊りを披露してくれたり、日本語で歌を歌ってくれたりして、私たちを歓迎してくれました。

次に、私たちは自己紹介をして、インドネシアで初めて今まで練習してきた防災教育を実践しました。実際に子どもたちの前で披露してみると反省点がいっぱいでした。劇の途中でカンニングペーパーをみたり、インドネシア語ができないのに、インドネシア語っぽく言おうと焦ったのか、早口で小さな声になってしまいました。防災教育の後は、歌を歌ったり、即興でゲームをしたりし、いろいろなことをして交流しました。孤児院の訪問は短い時間でしたが、子どもたちと遊んで楽しく過ごせました。何より孤児院ということ忘れてしまうほど、子どもたちが元気だったことに感動しました。



## スワダヤ大学訪問



インドネシア 2 日目、私たちはメダンにある私立のスワダヤ大学の日本語学科を訪問しました。スワダヤ大学の学生さんは、インドネシア伝統の豊作を祝う踊りで私たちを歓迎してくれました。私たちからは日本文化の紹介として、体育学部所属の柴原さんと花尾さんによる空手の形の披露、1 回生と 2 回生によるソーラン節の踊りをしました。その後屋外へ出て、インドネシアの遊びで、半分の形のココナツに紐を通し、その上に足を乗せて歩く、ちょうど日本の「カンボックリ」のような遊びをしました。そして、最後にはスワダヤ大学の校舎内を一緒に散策しました。スワダヤ大学の皆さんは本当に社交的で、貴重な文化交流ができたと思います。

## 北スマトラ大学訪問

午後からは北スマトラ大学文学部で日本語を学んでいる皆さんを訪問しました。ここでは、私たちはインドネシア語による防災教育の劇、北スマトラ大学の学生たちは日本語の寸劇を披露し、意見交換をしました。

まず、私たちの防災教育、インドネシアで唯一の大学生を対象とした発表でした。大学生なので、小学生よりは難しい説明もやっている内容も分かってくれるだろうと思っていましたが、後から考えると旅の中で一番広い場所であり、声が聞こえにくかったり意味が伝わっていなかったりしたと思います。昨日の孤児院に比べれば、まだ学生さんたちの反応は良かったものの、ハッキリと発音することや、まだ台本離れできていないことなど、反省点はいっぱいありました。次は、いよいよ、北スマトラ大学の番です。その劇のストーリーはある意味洗練されているラブストーリーで、とてもおもしろかったです。しかも、皆さん、日本語が上手で、台本もみていないし、声も大きかったと思います。

こうして、お互いの劇が終わり、最後には学生たちの自由な交流時間がありました。インドネシア語、日本語や英語を使っていろいろと話したり、写真を撮ったり、住所やメールアドレスの交換をしたり、折り紙のプレゼント交換もありました。最後は皆、北スマトラ大学の生徒にもみくちやにされましたが、楽しい時間を過ごせたと思います。



## ニアス島へ！ そして、ホストファミリーとの対面

活動3日目、プロジェクトの主たる活動の場であるニアス島へ移動しました。予想していたよりも遥かに小さなセスナ機に乗りこみ、「いよいよニアス島に行くのだ」という期待と緊張が入り混じった何とも言えない気持ちを抱きながら揺られること約一時間、ついにニアス島に到着しました。グヌンシトリのホテルで昼食をとった後、モアウォ小学校へ移動しました。小学校では日本とは少し異なる現地の教室を使っでの防災教育のリハーサルをして、最後の確認をしました。

リハーサルの後に、今日から約1週間、ニアス島でお世話になるホストファミリーと対面しました。今まで一緒に行動していた仲間と離れ、言葉もほとんどわからない土地でのホームステイということもあり、緊張と不安でいっぱいでした。しかし、一人ずつ名前を呼ばれてホストファミリーを紹介され、握手を交わしたり、抱き合ったりして、少し緊張がとけた様子でした。また、去年のプロジェクトに参加したメンバーたちが、一年ぶりの再会を喜ぶ姿も見られました。全員の紹介が終わった後、皆、ホストファミリーとそれぞれの滞在先に別れ、各々の時間をすごしました。



### コラム インドネシア初！手で食べた！！



ホテルのテラスで、昼ご飯に「ナシブングス」というバナナの皮でご飯を包んであるものを頂き、初めて手でご飯を食べました。道具を何も使わず、素手で食べるという慣れない行為に初めはぎこちなさも見られましたが、食べ終わる頃には皆、スムーズに素手で食べていました。初めて素手でご飯を食べた感想は「手で食べたほうがおいしく感じた」です。

## モアウォ小学校での防災教育



いざ、本番です!!! 全てはこの日のために研修や練習を積み重ねてきました。その結果は…「しくみ班」では体調を崩したメンバーがいて、急遽、代役をたてなければならず、班全員でのスタートは切れませんでした。「避難班」では体調は崩したものはいなかったのですが、台詞や演技などを間違えないようにするだけで精一杯でした。

演じるときの目線や声の大きさ、子どもの反応に留意すること、もっとゆっくり喋らないと伝わらないということ、重要な単語は2回繰り返すことが必要など、本番だからこそ見えた課題や改善点がたくさんありました。

防災教育は3年生から6年生を対象に、1日に2学年に対して行ないました。1学年が終わると休憩を取り、その時間に、お互いに良い点、悪い点、改善する点を言い合い、次はもっと良くなるようにミーティングをしました。次の回の直前には改善点を特に意識して演じるように注意し合ったり、成功させるための気合いの円陣を組むなど、徐々に皆の気持ちは1つになっていくように感じました。そのおかげで、2日目には子どもたちの反応を見ながら少し余裕を持って劇ができました。

また劇の後では、劇で学んだことを活かし、きちんと行動にできるように、避難訓練を行ないました。まず、私たちが教室で一齐に「ada gempa——! (地震だ!)」と叫び、机や椅子を揺らして本当に地震が起こったかのようにしました。子どもたちにはそのときに机の下にもぐるように教えました。子どもたちの中には私たちの声に喜んでしまっ、もぐれない子もいたので、それをみんなで注意しました。それから、一列に並び頭をかばんで守りながら、校庭に避難させました。校庭では担任の先生と一緒に子どもたちを並ばせて、人数を確認しました。私たちも回数を重ねるごとに次第に慣れてきて、誘導・指示が上手にできるようになりました。最終日には全体で避難訓練を実施しましたが、子どもたちはみんな上手に避難ができました。



もし本当の地震が起こった時に、私たちの防災教育を聞いた子どもが、防災の手順を他の人に教えて、その教わった人がまた別の人に教えて…と防災の知識が子どもたちから人々の間に広がっていくかもしれない。私たちのした「行動」がとても多くの命を救うことになるかもしれないと思うと、本当に大きなことをしているのだなと思いました。

## コラム 折り紙とサッカー？

残念ながら雨のせいで予定していたドッジボールのクラスは中止になりました。全員急遽折り紙のクラスに混ざり、“鶴”、“飛行機”、“兜”などを教えました。飛行機は皆で一斉に飛ばして、誰のが一番遠くまでいくのかを競いました。すると、1位は…イッシー（石田）の飛行機でした。子どもたちはちょっとがっかり。では、2位は誰かなと思うと、ハナ（花尾）の飛行機…。ニアスの子どもたち、ごめんね。その後、少し晴れたのでなんと日本・天理選抜チーム VS インドネシア・ニアスの子ども約30人という夢のカードが!?しかし、蹴り上げたボールが屋根に直撃するというハプニングが…住原先生に「校舎を破壊しないように」と注意されました。



## サエヴェ小学校での活動



ニアス島2つめの小学校、サエヴェ小学でも防災教育をしました。まず、子どもたちの朝礼に参加し、校長先生から私たちのことを紹介していただきました。どの子どももしっかりと校長先生の話聞いていました。防災教育は昨日までとは違い、避難班の発表から始まりました。避難班が先にやるのは初めてだったのでメンバーはとても緊張しました。しかし、その緊張とは裏腹に、サエヴェ小学校の子どもたちも元気で明るく、クイズを出題するとすぐに手を上げて参加してくれました。最後にふさわしく、今までの中で、一番いい反応を得ることができたと思います。この後、アブラハムゲームもしました。アブラハムゲームとは、最初は歌いながら手を左右に動かすだけ、その次は手と足、その次の歌では手と足と頭…というように動かす体の部位が増えていく遊びです。最終的には全身を使って踊ることになるため滑稽にみえますが、とても盛り上がりました。

日本の天理小学校や織田小学校の子どもたちと絵の交換をするため、子どもたちにも絵を描いてもらいました。用意しておいた画用紙と色鉛筆を配り、「ニアスらしい絵を描いて下さい」とお願いしました。子どもたちはしばらく考えていましたから、黙々と描き始めました。定規や色鉛筆の取り合いをしたり、隣の席の子と混じりながら言い合いしている子どももいましたが、直線をフリーハンドではなく定規などを使って、丁寧に描いていたのには驚きました。日本の小学生の皆さんが、こうして完成した絵を喜んでくれるといいなあと思いました。サエヴェ小学校での活動は1日だけでしたが、とても良い活動ができたと思います。



# 防災教育を終えて・・・

こうしてプロジェクトの目的である防災教育はすべて終了しました。以下は、防災教育を終えたメンバーの声です。



■モアウォ小学校の子どもたちはすごく元気で、クイズが出されると積極的に答えてくれました。中でも印象的だったのが、3・4年生を対象に防災教育を行なったときに、劇の中の台詞で「外に逃げよう！！」といった瞬間、半分以上の子どもたちが鞆をもって外に出ようと勢いよく立ったことです。これを見たとき、とても素直な子どもたちだなと思いました。避難訓練は初めてということもあってか、皆すごく真剣に取り組んでくれました。これが日本の小学生だったら喋ったりしているのだろうと思います。今回はじめて試みた防災教育ですが、少しでも現地の人びとの頭のなかに避難の知識が残り、いつかたくさんの人びとの助けになればいいなと思っています。（新井）

■最初の頃の防災教育では、おもしろおかしく理解してもらおうという主旨とは裏腹に全く笑ってもらえなかったことに落胆していた。しかし、日を重ね、ミーティングを重ねるうちに、参加者一人一人が自覚を持ち出したのを、しくみ班の劇を見て感じた。成果としても、子どもたちの笑い顔と真剣な眼差しが、最初とは俄然違ったものとなっていた。防災教育を通じて、伝えることにおいて大事なことは言葉ではなく、伝えようとする気持ちであることに気づかされた。（菊池）



■私は「一手一つ」を身にしみて学ばせてもらった。防災教育を真剣にみんなが聞いてくれたのも嬉しかったが、一番私がうれしかったのは、その後で行なった避難訓練でみんなが、劇でしたことを思い出して実践してくれたことだ。何よりも嬉しかった。ちゃんと伝わっていると実感できた。私たちは異国の地で精一杯のことをやらせてもらえたと胸を張っていえる。「次に地震が起きた時に、一人でも多くの人助かってほしい」というみんなの想い、それが実現したときに、この防災教育は成功した！といえると思う。(前堀)



■私はモアウォ小学校での防災教育を通して大きく2つのことを学んだ。1つめは、難しいことを簡潔に伝えることの難しさ。2つめは、防災教育をすることで自分の知らなかったことを知れることだ。他にも防災教育を通して学んだことはたくさんある。しかし、これらのことは自分で実際に体験してみて、初めて気づくことができることだと思う。「挑戦すること」の大切さを知った。(井元)

■日本のように小さい頃から、幼稚園などの教育機関で防災教育・避難訓練を受けていないので、モアウォ小学校の子どもたちにとって、初めてのことだったと思う。実際にスマトラ沖大地震で大きな揺れや津波などを体験した子どもたちにとって、僕たちの防災教育はどう受け止められたのか。子どもたちだけでなく、僕らがニアス島で関わった人たちが、きっと前向きに受け止めてくれていると信じたい。今回のプロジェクトに関わった天理大学のメンバーはそう思っていると思う。(花尾)





# モアウォ小学校からの声

\*\*\*私たちの防災教育をモアウォ小学校の皆さんはどのように思われたのでしょうか。現地活動スタッフの高藤さんが先生と子どもたちにインタビューしてくださいました。\*\*\*



## < Inadarno Harefa 先生 >

・天理大学のニアス訪問は2度目になりますが、今回の取り組みについて感想をお願いします。

——そうですね。天理大学の先生方をはじめ、大学生の皆さんの今回の再訪は、私たちにとってうれしく楽しい出来事です。子どもたちにとっても今回の皆さんの活動はとても有意義なことでした。皆さんの来校をとても楽しみにしていたのはもちろんですが、今回のこの防災教育は楽しいだけでなく、私たちにとって役に立つ何よりの教育でした。

・天理大学にさらに今後期待することはありますか——今回、実施して下さった防災教育では具体的に地球を卵になぞらえ、地震や津波がおこるメカニズムを教わったり、劇やクイズを通して地震や津波が起こった際の避難方法を学びました。私たちは2年半前に被災しましたが、私たち島民はそのことを自分たちの記憶の中から消してしまおうとしているのが現実です。被災から再び立ち上がり生きていくためには、時として事実を記憶から取り去ることも必要だったのです。ですが、先程、校長をはじめ、教師皆で話をしていたのですが、今度またいつ来るかもしれない地震や津波から自分たちの身を守るには今回教わった防災教育を子どもたちに復習させ、語り継ぐことが重要だということに気づかされました。今回だけでなくこれからもこの防災教育を、子どもたちが興味を持てるような方法で続けていただきたいです。今回の劇やクイズは子どもたちにとって大変わかりやすい方法だと思います。

・子どもたちを地震等の災害から守るために必要なことは何だとお考えですか——具体的に申し上げますと、子どもたちの身を守るために、これからは学校にヘルメットを常備すること等が必要ではないかと考えます。でも何よりまず大切なことは、地震、津波等が起こった際にパニックに陥らないよう、日頃から教えることだと思います。

・被災した子どもたちの精神的痛み(心の痛み)を取り除くにはどうしたらよいとお考えですか——まずは何より「安心感」を与えることだと思います。「もう大丈夫、こわくない・・・」

ということを教え、諭さなければならないと思います。また同時に、「神は常に私たちのことを守って下さっているのです祈り続けましょう..。」ということ伝えることも忘れてはなりません。私たち教師、また親は子ども達の心の痛みを取り除くために常に知恵を絞らなければならないと考えています。天理大学の皆さんがニアスへいらっしやって下さることは、子どもたちにとって大きな楽しみであり、また安心感ももたりました。

・大きな被害にあったにもかかわらず、子どもたちがとても明るく前向きに生きていることに感激しました。ニアスの子どもたちも昨年からまた大きく成長していることと思いますが、天理大学の学生たちから子どもたちが学んだことはありますか——もちろん、たくさんのことを学びました。防災教育においては、「災害が起こった時にはパニックにならずに、冷静になって行動しなければならないこと」の大切さを教えていただきました。また、折り紙等を通しては、世界の中には自分の国とは違う文化をもった国があるということで子どもたちは身をもって「世界」というものを感じることができたことと思います。

・子どもたちにどんな防災教育をしたらよいとお考えですか——防災教育は今まで学校の授業としては考えられていないことでした。私たちもどちらかというと政府、あるいはNGOが行なうもの…という認識でいました。ですが、この教育はもっと小さな単位で考え、行なっていくものだという事に気づかされました。これからは、学校、地区単位で行なっていくものとして、学校の授業の1つとしても取り入れていかなければなりませんね。

・子どもたちは日本という国に興味を持っていますか——もちろんですよ。子どもたちはみんな日本が好きです。高学年にいけばいく程、日本を訪れたいと思う気持ちが強いようです。日本のお兄さんやお姉さんと交流できることが本当に嬉しいようです。

・天理大学や日本の方々へのメッセージをお願い致します——今後も継続的にニアスにいらっしやっていただき、共に学び、共に働きたいと思っております。モアウォ小学校と天理大学とは「協力」することが何より重要なことと考えています。私たちも力の限り、尽くしたいと思っております。教師の立場として教育や文化の援助とともに、今後はまた経済的な援助もお願いすることになるかもしれません。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

**\*\*\*ありがとうございました。ご協力に感謝申し上げますとともに、またお会いできます日を楽しみにしています。\*\*\***





### <児童へのインタビュー>

・昨年、日本の天理大学から大学生が来ていろいろ遊んだことを覚えていますか？

——覚えています！

・今年は天理大学の大学生から何を教わりましたか？

——地震や津波について教わりました！

・その授業はどうでしたか？ 大学生をどう思いましたか？

——お兄さん、お姉さんはとても楽しいし、授業もおもしろかったよ！とても楽しいので昨年もお兄さん、お姉さんが帰ってしまった後は、とても寂しくなってしまうて、みんなで泣いてしまいました…。だから今年また会えてとても嬉しかったです！

・どんなことが楽しかった？

——劇がおもしろかった！それから縄跳びをしたり（一緒に飛んだり跳ねたりしたこと）、ボールで遊んだこと、歌ったこと、踊ったり、折り紙をしたこと!!!

・災害の時は助け合うことが大切ですね。

——はい、そうです。

・あなたは、あなたのご両親や兄弟たちやお友達にどのようなことがしてあげられますか？

——一緒に大切な荷物を運んであげることができると思います。

・大切な荷物って何かな？

——学校の机、洋服、食べ物、飲み物、財布、かばん…。(地震の際は広い場所、そして津波の場合は高台に避難することは理解できているものの、子どもたちは大切なものを運び出すことが重要だと考えているようです。)

・ものも大切だけど、まずは自分たちの身の安全を考えましょうね..。

——はい！

**\*\*\*このように、プロジェクト最大の目的である防災教育は、結果として子どもたちに100%分かってもらえたとはいえないかもしれません。しかし、一人一人に1%ずつでも理解してもらえていたなら、それが種となり、いつか実を結ぶのではないかと考えています。\*\*\***

## ニアスとのお別れ

私たちはお世話になったモアウォ小学校とホストファミリーの皆さんに感謝の気持ちを表すために、お別れ会をして、日本食を振舞うことにしました。日本食の準備は夜にランチボックスを組み立てる作業から始まり、お別れ会当日の朝、現地活動スタッフの高藤さんの指揮のもとで、日本食のカレーとじゃがいもを使った大学いもの調理にとりかかりました。私たち以外にも、モアウォ小学校の先生方もニアス料理を作られたので、協力し合って一緒に作業しました。



お昼ごろになるとモアウォ小学校とサエヴェ小学校の先生方や子どもたち、地元の名士がモアウォ小学校に集まり、お別れ会が始まりました。予定していたプログラムと多少順番が変更したりで戸惑いましたが、私たちは着物を着て踊ったり、歌を歌ったりと数々の出し物を披露しました。モアウォ小学校の子どもたちがダンスを披露してくれれば一緒にダンスに参加したり、逆にこちらが歌を歌えば一緒に歌ってくれたりとても楽しい時間を過ごしました。最後に、校庭の真ん中で輪になって、別れを惜しむように子どもたちと踊りました。



とうとう、ニアスでお世話になったホストファミリーとのお別れです。よく歌い、少しずつコミュニケーションがとれるようになり、皆かけがえのない時間を過ごすことができました。そのためか、メンバーそれぞれが感動的なお別れをしました。「日本に帰っても私が母だ」と言ってくれる方や「来年も来てほしい」と温かいお言葉を頂いたメンバーもいたようでした。ニアス島の空港へ移動する際には、道路脇の海をぼんやり眺めながら、ニアス島での思い出を振り返っているためか、少し静かな車内でした。

## ブリヂストンの工場見学

プロジェクトの終盤には、日本とインドネシアの関係を学ぶために、ブリヂストンの工場とゴム農園を見学しました。ブリヂストンの敷地はとても広くて、プール、ゴルフ場、小学校、サッカー場、教会、病院、テニスコートなどがあり、敷地内で十分日常生活ができるようになっていました。見学では、まず、担当の方から会社の概要やゴム製品について簡単に説明していただきました。



次に、実際にゴム園へ見学にいきました。ゴムの木の栽培はゴムの木の種を専門の業者から購入するところから始まります。種を植えて育てたあと、3本のうちの一番育った苗木を選び、必要な品種の木のみを育てます。苗木が小さい時はポリ袋に入れたままで、栄養を十分に与えて、しっかり管理しながら育てます。その

後に実際の農園に植え替えます。こうして大事に育てた木からゴムを採取することをタッピングといいます。タッピングは収量の一番多い早朝から午前中に行なわれ、木の1.4m高さの地点における幹の周囲が46cmに成長した時点から開始します。1.4m地点から下半面に向け地面近くまで4年、1.4m地点から1/3面を上に向けて1.4m高さまで4年と、上下交互にタッピングし、最低20年は採取可能です。そこから流れてくるゴムは幹にとりつけたカップにたまっていきます。カップにたまった生ゴムに適量の蟻酸を注入するとカップランプと呼ばれる固体になります。1本の木から3日に1度の頻度で採取し、だいたい1ブロック(475本/ha)から1年で採取できる量は1.8から2.0トンです。雨の日は採取できないので、収量は雨量に左右されるそうですが、年間28,000トンが採取されているそうです。最後に採取したゴムの塊から石などの不純物を排除して、重量を測り、加工工場に回します。

加工工場では、ゴム園で採取された生ゴムの塊からさらに異物を取り除き、買い手のニーズに合わせて加工していきます。まず、塊を砕いて水で洗い、4時間ほど乾燥させます。それから、一定の大きさ・重さ(35kg/ベール)に成型し、36ベール(1.26トン/パレット)単位で梱包します。厳重な外観検査や品質検査で合格した天然ゴムのみが日本やアメリカなどのブリヂストン工場に送られます。良い品質のゴムを保つために、原料を開発しているそうです。また、製品の使用頻度(乗り物の荷重・速度)が高いほど、合成ゴム対比バランス性能の良い天然ゴムが多く使われています。例えば、飛行機のタイヤなどは天然ゴムがメインで作られており、検査がとても厳しいそうです。ゴムの木の植林から天然ゴムができるまでについて一通り学習した後、おいしい昼食を頂き、ブリヂストンの見学は終了しました。多くのことを教えて頂き、ブリヂストンの皆さんありがとうございました。



## コラム バタック文化とシピソピソの滝

トバ湖の周辺には昔からバタック人と呼ばれる独自の文化をもつ民族が生活しています。バタック人の家は高床式で、ヤモリの彫刻がよく見られます。それはヤモリのようにどんな場面にも対応できて、どこでも生きていけるということが関係しているそうです。また釘を使ってなかったり、窓がなかったりしました。窓がないのは悪い精霊が入ってくるからで、裏口がないのは昔、王の第1夫人が他の男性と遊んでいるところを発見されたのをきっかけに閉められることになったそうです。



メダンへ戻る途中で訪問したシピソピソの滝はすごくきれいでした。とても良いロケーションの中、滝の上でゆったり休憩しながら滝を見たりできましたが、驚くことに、滝の下までの1キロほどを降りて戻ってきた人も4名（先生1名を含む）いました。降りた人によると、「汗だくになりましたが、大量のマイナスイオンに癒されました」ということです。

※特に、メダン到着後から出会ったヘンドリ・黒岩さん&ハディジャ・梅田さんご夫妻。メダン市周辺の活動で大変お世話になりました。

Terima kasih banyak（ほんとうにありがとうございました）

## さようなら インドネシア

メダンへ向け出発した後、「インドネシアも見納めだな…」と思いながら車窓からの風景を眺め、2週間を振り返りました。参加者全員でインドネシア最後の食事をしました。メダン国際空港で、引き続きジャワ島へ文化実習に赴くインドネシア語コースの皆さんと別れた後、私たちはたくさんの思い出を胸にインドネシアを発ちました。途中、マレーシアを経由しましたが、それからは夜のフライトだったので、寝ている間に関西国際空港に到着しました。全員無事に帰国できたことに感謝し、2週間を共にした仲間とも別れ、各自帰宅しました。





# 第Ⅱ部

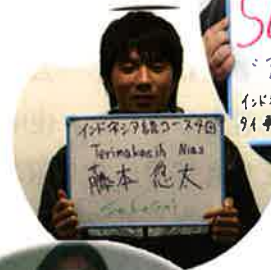


# 感想文





# Terima kasih banyak



なお、感想文の下にある赤枠で囲まれたところは「ホームステイ先での喜縁伝愛」をテーマとする参加者のエッセイです。



## e n ～ 旅の途中 ～

紫原 陽介

(体育 スポーツ学 4年)



私はこのプロジェクトに参加して、日本には知り得ない、とても多くのことを学び、感じました。初めての外国であり、見るもの全てが新鮮で、発見と驚きの連続の旅でした。

活動のメインである防災教育についての研修は、日本での曾爾高原で本格的に始まり、途中教育実習で1ヶ月抜けたため、私としては少し不安の残る結果に終わりました。そして、現地に赴き、孤児院やインドネシアの大学でのデモンストレーションを通して初めて自分の現状を知り、課題が見つかり、良い意味で皆にも火がついたようでした。そして、モアウォ小学校では、回を重ねる度に力強く自信を持って、最後では皆が一つになって劇ができていくのを感じました。私のこのプロジェクトが成功したかどうかは、実際に地震が起こった時にしかわからないですが、やれるだけのことはやったと私は誇りを掲げたいと思います。

ニアス島でのホームステイでは、初日は言葉が全くわからず、勧められるがままに夜8時に就寝しました。夜中、不安でたまらずに起きていたら、父さんのいびきになぜか安心感を覚えてぐっすり眠れました。それからというもの、『旅の指差し会話帳』は離せずの毎日でした。手で食べること、直接水を流すトイレ、ブロックに囲まれた冷たい水でのマンディ（お風呂）など、インドネシアの生活に生で触れて、去る頃には本当にインドネシアに染まっていました。他にも停電の夜の満天の星空や、突然のスコールを眺める穏やかな午後…。流れに身を委ねて、自然との共存についても感じた瞬間がそこには多々ありました。また、受け入れ側のホストファミリーの皆は、私のする早朝練習のランニングや、ギターを片手に歌った日本の歌に大変興味を示してくれました。特に日本語を覚えたバリー姉さんは片言の日本語で話しかけてきてくれました。逆に、私は母さんからはニアス島の唄『TANO OMASIODA』を覚えてもらい、今でもよく鼻唄で唄っています。しかし、なんと言っても父さんに「お前はこの子たちの兄弟で、私たちは家族だ。いつでも帰っておいで」と言われたのが、このプロジェクトでの私の一番の宝です。

そして、リーダーとして思ったのは、このプロジェクトに参加した皆は、本当に人のために、何かのために一生懸命な心の優しい者の集まりなのだということです。誰一人文句を言わずに自分で考えて行動するので、正直困ることは何一つありませんでした。あるとすれば、もっと自分が引っ張って行って嵐の様に色んなことに巻き込めばよかった、と今になって思います。

振り返ってみると、本当に多くの人、物、場所、などに出逢いました。そこから私は、縁によって広がる無限の可能性について深く考えるようになりました。「何のために生きているのか」、「人と出会うことに何の意味があるのか」、答えは人それぞれ違いますが、私

は、何かに出会うことによって、「また会おう」という気持ちが生まれます。その気持ちが、未来の約束を果たすために生きる理由となります。そのような気持ちが生まれる人との巡り合いというのは、とても素敵で、とても素晴らしいと私は思います。

今は、大学ではプロジェクトに参加した皆や先生方、体調を崩した時に看病してもらった高藤さん、向こうで知り合った大学生のニックネーム“紫少女”、ホームステイの隣に住む兄さん、そして僕の憧れ、プロのカメラマン・アミジョーさんと連絡を取り合っています。本当に色々な“e n”がありました。全ての出逢いの“縁”、そこから広がる“円”、皆で作った“演”、その情熱の“炎”、お別れ会の“宴”、良い感じに磨かれた“艶”。人生という旅の途中でこれほど濃い多くの“e n”に出逢えて本当に幸せでした。

始まりの終わり。さて、これからなにを始めようか。

Semuanya, sampai jumpa lagi ♪  
Saya suka jalan-jalan keliling dunia ★  
Saya cinta pada anda semua ☆

### もうひとつの家族

ホームステイをさせて頂いている間、私は合気道部に所属していたので、家族たちと一緒に早朝練習をしました。具体的には、朝、小学校までランニングをして、敷地内で基本の突きや蹴りをしました。教える時は、片言のインドネシア語で話しましたが、あまり通じたのかわからなかったので、手取り足取り教えて、あとは見様見真似でやりました。他にも、相撲などをして一緒に遊びました。

料理や食文化では、「チャーハンの素」、「ハイチュウ」、「ふりかけの“のり卵”」をごちそうしました。「チャーハンの素」、「ハイチュウ」はおいしいと評判でしたが、「ふりかけの“のり卵”」はしょっぱいらしく、とても意外でした。言語に関しては、日本語のひらがな、カタカナを教えたので、挨拶や日常会話を日本語で話してくれました。「日本語では…」というように、何かある度に教えるとすぐ覚えたり書き留めたりしていました。片言で単語ばかりでしたが、お互い様なので良い調和が流れていた気がします。唄でも、ゆずの『また会える日まで』をインドネシア語に訳して唄いました。とても気に入ったようで、鼻唄で Bapak(お父さん)はよく口ずさんでいました。他には、子どもたちに「ドラえものの歌」を日本語で教えました。Ibu(お母さん)には「心の友」の歌詞を教えると夜な夜な歌っていました。私もアカペラで日本の歌を唄い、「あなたは歌手ですか」と言われて、ちょっぴり嬉しかったです。

私のいる間、たくさんの文化を学ぼうとしてくださり、たいへん嬉しく思いました。逆に、こちらもただ一緒にいるだけで多くのことが学べて、良い思い出となりました。家族の皆、ありがとう。(柴原)



## ドラマチック in インドネシア

花尾 義隆  
(体育 スポーツ学 4年)



めちゃ楽しかったあ。僕が現地で見えてきたものはすごくドラマみたいでした。始まりは「インドネシアに行こう!!」とただそれだけだったのが、今となっては、今回のプロジェクトに参加せずに大学生活が終わっていたら、まったく違う自分がこの場にいるのだと思います。来年も「国際参加プロジェクト」でインドネシアに行くなら「是非一緒に行かせて下さい」と、絶対にまた行きたいと思えるくらいインドネシアは素晴らしい国でした。インドネシアに行って思ったことはたくさんありすぎるくらいやけど、やっぱり人の温かさが一番大きかった。本当に良い人ばかりと出会えたなあと感じたし、自分の中で生まれた感情は今までにないものばかりでした。

今回のプロジェクトでは防災教育というのがメインでした。僕自身は小学生の頃に阪神淡路大震災を経験し、十数年経った今でも地震の時のことを鮮明に覚えているし、地震の恐ろしさを思い知らされました。しかし、ニアス島では、スマトラ沖地震・津波の被災地にも関わらず防災教育(防災訓練)という概念は大人にもなく、僕らはそんな中で防災教育を行ってきました。実際はたくさん問題があって、準備段階から色々と試行錯誤し、現地でもいろいろな方からアドバイスを頂いて、それをできる限り取り入れひとつひとつ改善して行って、最後には最高のものができあがったと思います。ニアスの子どもたち、また周りの大人たちが僕らの防災教育で意識が少しでも変わったなら素晴らしいと思います。たとえ避難方法を知っていても、防災訓練をしていても、大きな地震が起これば日本でもちゃんと対処できる人ばかりではないです。そこで自分に何ができるのか、どうすれば一番良いのか考えるというきっかけができたのが今回だったと思います。これを機会に意識から具体的に良い方向に変わって行ってほしいと願います。

ニアス島は海がすごくきれいでよく散歩したし、トイレとお風呂も日本と違って慣れるのに少し時間がかかりました。あとはホームステイで僕がお邪魔した家は、日本では珍しい大家族という構成。スマトラ沖地震・津波の時の話やニアス島の伝統のこと、いろいろな話をしてくれました。一緒に散歩に出かけたり、ニアス島での結婚式も少し参加させてもらったり、ダンスを教えてもらったりと、すごくオープンで日本のことにも興味をもってくれていました。やっぱり言葉のやり取りの多くは辞書などを通してなので大変だったけど、少しずつ覚えてきました。日本の歌を少し知っていたので、一緒に熱唱し、音楽は本当に世界を繋ぐものになりうるのだと思いました。だからそれほど言葉の壁というのは感じませんでした。もっと歌や楽器が上手になりたいと思ったし、ニアスの生活には音楽や踊りが溢れていたもので、すごく僕にとっては理想の生活でした。お互いの言語の

交流といった感じで言葉を交わし、同じ言葉でも国が違うと意味が変わったりするので、ごくおもしろかったです。それにインドネシア語はすごく語呂が可愛くて馴染みやすく、話していてすごく楽しいです。もっとたくさんインドネシア語を勉強して行けばよかったですなあと思いました。

最後に僕は4回生で教育実習もあり、いろいろとすべきことのある中、プロジェクト成功の為に少しずつ積み上げてきたわけですが、こうした結果を収められ無事に帰国できたのは、僕の知らないところで動いてくれていた方がいるわけで、もちろん先生方やメンバーのみんなのお蔭だと思っています。その地に根つき生活を共にすることで分かることが多くて、旅行で行くだけじゃ体験できないことをさせてもらいました。それもこれもプロジェクトという機会を頂いたおかげだと思います。そして何よりインドネシアという国が大好きになりました。また新しいドラマを作り、インドネシアに行ってきます。

### かわいい子どもたち part1



最初は恥ずかしがっていた子どもたちも、あっという間に打ち解けました。写真が大好きで、家で撮影会みたいなことをした程です。子どもたちはスパイダーマンが大好きで、家でもスパイダーマンの真似をして壁を蹴って登る振りをしていました。ちなみに写真を撮る時の子どもたちの決めポーズは、ちゃんと☆スパイダーマン☆でビシッと決めてくれてます。

あと、庭先でギターを弾いて日本の歌(宇多田ヒカルなど)を熱唱したのは楽しかったです。ドラえもんやドラゴンボールの歌を歌ったりして盛り上がった。そして、みんなでギターを毎日のように弾いていました。

また、たくさんジャランジャラン(散歩)に出掛けました。教会に行った帰り道では、卓球台を発見し、持ち主の女の子に勝負を挑みましたが、けっこう上手でビックリしました。そして港まで歩いて行ったり、バイクに乗せてもらって市場まで買い物に行ったり、また、歩いている最中にはドリアン市場らしき場所で、現地の方と話を盛り上がりました。帰り際に、ドリアンを1つ頂き、その場で食べさせてもらった。すごくエナッ(おいしい)でした。

お土産では、「祭」という文字の入った「うちわ」をあげたり、「わさびふりかけ」をあげたんですが、大喜びですごく気に入ってました。日本語で色んなことを教えたりしたので、言語の交流もできて良かったと思います。(花尾)

## 胸に焼きついた熱い思い出

北 翔太

(欧米 ブラジル 4年)



今回、初めてこのプロジェクトに参加させていただきました。面接を受ける前から、期待と興奮で胸がいっぱいでした。僕は、このプロジェクトで、防災教育はもちろんですが、防災教育以上のモノを伝えたいと思っていました。

事前研修では、プロジェクトのメンバーが1つになるために何か作りたいという意見もあり、僕と花尾君でTシャツ作りをすることになりました。最初、デザインがなかなか決まらず、悪戦苦闘していました。訳が分からない案もいっぱい出ましたが、最終的にこのプロジェクトをイメージさせる漢字を出していくことにしました。「愛」「喜」「心」「伝」「縁」などの漢字を思いつき、初めは「縁喜伝愛」でした。しかし、語呂に合わないと、「喜縁伝愛」としました。意味は読んで字の如く「縁を喜び、愛を伝える」としました。僕たちはこの言葉に熱いモノを感じました。

そして、インドネシアの活動では、様々な驚き、感動、笑顔、元気に出会いました。まず、生活習慣の違いに驚き、戸惑いました。例えば、トイレにはトイレットペーパーがありませんでした。水が張ってある樽のようなものがあり、そこから桶で水を汲み、その水でお尻を洗うらしいのですが、僕にはどのようにすればいいのか全く分かりませんでした。他に、お風呂にも戸惑いました。トイレと同じで水が張ってある樽のような所から桶で水を汲み、浴びるのですが、その水の中には魚が泳ぎ、よく見れば細かい藻のようなものが浮いていました。決してキレイとはいえない水で体を洗いました。

何よりも、子どもたちの最高の笑顔とエネルギーな元気に唖然としましたが、すごいエネルギーを貰いました。そして、団結力、人の温かみ、生きていくという事の素晴らしさに気づき、感動し、涙しました。特にホームステイでの交流が一番印象深かったです。昼間は子どもたちとサッカーやバレーをしたりして遊び、停電になった夜には、月の光の下でろうそくを灯し、柴原君の家族や他の家族と集まって、歌を歌ったり、空手教室が始まったり、いろいろなことを話したりもしました。人と触れ合うことの幸せに痛感した一週間でした。

防災教育では、僕は避難の仕方を教える班で活動しました。僕たちはインドネシア語を全く知りませんでした。だから、頼りない言葉だけで伝えるよりも、動作や絵などをも駆使した劇を作り教えました。ただ、単純に劇をしたのでは子どもたちが飽きてしまうので、子どもたちが飽きず、おもしろいコメディのような劇に仕上げた披露しました。1回1回、やる度に団結力が増し、見る見るうちにメンバーが1つに成っていく姿と一緒に活動しながらも感じました。特に最後の劇は感動しました。本番前に、いつものように円陣

を組み、「泣いても笑ってもこれが最後。絶対に成功さよう」という声を掛け合って結束を高め、本番に臨みました。本番中は、何回も劇を繰り返していたのもあり、初めのぎこちなさはなく、遊び心さえも生まれていました。だから、一番分かりやすく、おもしろい劇になったと思います。その時、みんな感じていたと思います。本当に団結し、一つになったからこそ生まれるチームワーク。そして、「絶対に成功させたい」という気持ちが全員から溢れ、伝わってきていたことを…。子どもたちは、本気でやっている僕たちの劇を、真剣に見てくれ、そして、本当に楽しんでいました。しかし、僕にとっての本当の感動はこの後にやってきました。劇が終わり、本番が終わるなり、全員が「やったー」と叫び、抱き合い、達成した喜びと感動を全員で爆発させました。この時、僕は少しだけその輪から外れ、一人で感動を噛みしめ、涙をグッと堪えながらその光景を客観的に見ていました。全然まとまりもなく、バラバラだったみんなが、目の前で同じ目的を達成し、同じ感動と喜びを、全員で感じて喜び合っている。みんなが本当に一つになったということに気づいた瞬間、本当に言葉にならない感動が僕の心に熱く刻み込まれた瞬間でした。何回も話し合い、試行錯誤を繰り返した賜物が最後に喜びと感動を与えてくれました。忘れられない最高の瞬間でした。

僕にとって人助けをすることは、かけがえの無い「学び」となりました。人はそれぞれ違います。だから、僕と他人も違います。生き方、経験、価値観、乗り越えた困難などさまざまに違います。中には、似たり寄ったりな部分も多かれ、少なかれあります。でも、違うのです。もし、違うのであれば、きっと僕にしかないモノ、できないことがあるはずです。もし、僕にしかないモノがあるなら、それを僕の中だけ終わらせたなら、きっと、誰かが同じ経験や苦しみを味わうでしょう。そして、僕が持っているモノが無いために苦しむ人が出てくるはずです。そう考えると一人一人が持つモノや力は大切なのです。僕が持っている全てを外(誰か)に放出することで、誰かが助かるなら…無駄ではないでしょう。でも、出さなければ、その助けは存在しません。もったいないと思います。だから、伝えるという行為は大切なのだということにプロジェクトを通して気づき、学びました。ここで学んだことをまた誰かに伝えることでプロジェクト自体が進化し、そして自分もまた一つ学び、成長していきたいと思います。

最後に、力を貸してくれた先生を始めとするスタッフの皆さんには心から感謝しています。

ありがとうございました。

\*北くんの「ホームステイ先の喜縁伝愛」は p.59 に掲載してあります。

そちらをご覧ください。

## サオハグルニアス (ありがとうニアス)

藤本 悠太  
(アジア インドネシア 4年)



僕は地震の仕組みを教える班に入っていました。劇ではアニメのキャラクターの格好をしました。僕は演劇がとても苦手だったので他の人よりは全然うまく出来ませんでした。自分自身では頑張ったつもりです。ニアス島では病気になってしまい、タイ語・インドネシア語コースの助手で現地指導補助としてこられた中田さんに代わってもらいました。だからニアスでは一回も劇に参加することができませんでした。メダンの孤児院と大学で劇をしました。初めてお客さんの前でした劇はとても緊張しました。でもお客さんの反応が良くて、演じやすい雰囲気でした。毎回劇をするたびに問題点をみんなで話し合っ、改善しながら演じたので回を重ねるたびに良くなっていったと思いました。なので、ニアスでできなかったのが本当に残念でした。

メダンでの活動が大変だったので、僕はニアスに着いたとき、もうすでに疲れていました。体調が崩れかかっていたと思います。2日目にホームステイ先に着いてマンディー(水浴び)をするとすぐに喉が痛くなりました。その後は半分以上ホテルで寝ていました。ホテルでは先生方と現地活動スタッフの方々に大変お世話になりました。体調が良くなってからは、ホストファミリーのところへ戻りました。ホームステイ先の家族はとても親切にしてくれました。

ニアスでの活動を終えてメダンに戻り、北スマトラのブリジストン工場を見学しました。見渡す限りのゴムの木のプランテーションが広がっていました。社会科の教科書で見た事はありませんが実際にそこに立ってみて、その規模の大きさに度肝を抜かれました。工場の人にゴムが出来るまでのプロセスも見せてもらいました。

工場見学の後、僕たちはトバ湖に向かいました。バスから眺めた景色は絶景で、夕日と山々とトバ湖がとてもきれいだったので感動しました。ホテルの料理も美味しくて、インドネシアの観光旅行気分を体験しました。次の日、メダンに戻る途中で泊まったホテルもいいところでした。ただ、ホテルに着いたのが遅かったのでほとんど寝るだけだったのが残念です。

今回の「国際参加プロジェクト」に参加して、大変だったけれど、いい経験ができました。インドネシアという国がより身近になりました。また行きたいです。

(＊インドネシア語コース海外文化実習として参加)

\*藤本くんの「ホームステイ先の喜縁伝愛」は p.56 に掲載してあります。

そちらをご覧ください。

# めっちゃありがとうございます

矢持 善徳  
(人間宗教学 3年)



私が今回のプロジェクトに参加した理由は、正直明確に「ボランティアがしたい」というようなものではなかった。大学生活の間に一度は全く違う文化や宗教に触れたかったこと、なんでも誰とでも楽しく何かをやる自信があったこと、そして誰かの力になれるということが好きだったことが大きな理由だった。結果として自信が先行しすぎて覚悟が足りなかったのか、プロジェクトでは個人的に大きく挫折した。何かをみんなと一緒にやっていくことの難しさを改めて実感した。

しくみ班の班長としての仕事をこなせていたかと問われて「はい」と胸を張って答えることはできない。正直班員や先輩や友達に大きく助けられて、今回の防災教育は良い形で終わることができたのだと思う。

防災教育の劇をしている間は結構楽しかった。しっかり吟味した内容で挑んだはずだったのに、ウケると思ったところでウケなかったり、練習した発音が下手だったので子どもたちに通じなかったりしたが、回を重ねるたびに劇自体が改良されていくことと、本番の中で班員のみんながいきいきとしてくることを感じる事ができたからだ。しくみ班は結局一度も全員参加での練習をすることができなかつたので心配していたが、意外とみんな本番に強いことがわかって嬉しかった。

私たちの防災教育の劇を見てくれた子どもたちはとても喜んでくれて、休憩中もしきりに話しかけてきてくれた。蹴ってきたり、手を握って引っ張ってくる感じはどこの国の子どもも一緒だった。外は日ざしが強くて、5分で日射病になれた。こっちが疲れていても子どもたちは容赦なく「ナカヤマタクミ？ イエー！！！」と集まってくる。あまりに笑顔がかわいかったので邪険に出来ず、一緒になって叫んでいた。「ナカヤマタクミ」って意味がわかっているのかとか、そういうことはもう関係なかった。

防災教育の延長としてホームステイがあった。ホストファミリーは言葉もほとんど通じないのに、僕と花尾さんをとても温かく迎えてくれた。とても良い人たちで、たくさんの思い出ができた。朝ごはんには必ず出てくるミルクがとてもおいしかった。実が黄色いドリアンはクセが強くて飲み込めなかった。実が白いドリアンはパイナップルの味がした。何よりマンディ(水浴び)の水槽の中に魚が泳いでいたのが衝撃的だった。おそらくその魚であると思われる焼き魚が晩飯に出てきた。マンディのことをニアス語で「モンディ」と言うのだが、「マンディに入りたい」でなく「モンディに入りたい」と言うと、とても喜んでくれた。しかし、基本的にホームステイ先では英語とインドネシア語を混ぜて会話していた。



その時には気がつかなかったが、日本に帰って父と酒を飲みながらその話をしたときにとても怒られた。現地のことを勉強させてもらうときは、「現地の言葉を本気で覚えることは当然、そうでないと相手は心のそこから言葉を話さない」とのことだった。素直にその通りだと感じ、反省させられた。

今回はとても楽しくて価値のある体験をさせてもらったと思っている。だが、反省させられたことがその倍はある。人生の中で、こつこつと今回の反省を生かして汚名返上していきたい。

最後になりましたが、学長先生をはじめ、先生方やホストファミリーのみなさん、今回のプロジェクトに協力して下さったみなさん、直接的、間接的に関わった皆さん、お疲れ様でした。本当にありがとうございました。

## かわいい子どもたち part2

僕は花尾先輩と同じ家にホームステイした。子どもたちが一番喜んでくれたのは身振り手振りで遊んであげたときだ。小学生だから下ネタも大好きで、「メメ」（乳の意）と言って僕らが恥ずかしそうにするのを見て爆笑していた。僕が持っていったお土産のチキンラーメンをとっても喜んでくれたのも嬉しくて覚えている。しかしキットカットの抹茶味はあまりお気に召さなかったようだった。僕もあの味はあまり好きじゃない。お姉さんにニアスで結婚式の時に踊るといふ伝統のダンスを教えてもらった。お別れのとき小学校で踊ったら「ナイスダンス！」的なことを言ってくれた。

昼、パパにチェスの相手をしてもらった。打ち方に性格が出ていた。全体の為に一人を犠牲にするような打ち方をしない人で、それでも強かった。結果は惨敗で「またしよう」とも「お前より私のほうが強い」とも言われた。

ホームステイ最終日前日の晩に日本の文化を伝えること、せめてもの恩返しが目的で、子どもたちに折り紙で鶴を折ってあげることにした。しかし何度試行錯誤しても織り方を書いた紙をみても全然鶴に至らない。僕はしょうがなく何か良くわからないものを作って手渡した。これが意外と喜んでくれた。恐らく「帽子」に見えたのであろう、僕の頭の上に2人の失敗作を乗せてくれて笑っていた。一方、その間花尾先輩はあきらめず黙々と試行錯誤を繰り返し、ついに鶴を完成させた。完成した折り紙の鶴をみて子どもたちも喜んでいて、誰より、自分自身も喜んでいて、嬉しかったのだろう、5個も6個も同じ鶴を折っていた。子どもたちのために日本の文化を伝えることができた。

(矢持)



# ポジティブ思考の発見

西峰 景子  
(アジア タイ 3年)



参加のきっかけは国際文化学部アジア学科に入学したので、アジアについて何を学んだのかと尋ねられた時に、自信をもって答えられるようになりたいと考えたからです。それから自分自身に挑戦してみたかったし、大学の伝統である「他者への献身」についても実践したいと思いました。そして昨年参加者からの話を聞いて、興味もわきました。このような思いから「国際参加プロジェクト」へと導かれました。ここでは、プロジェクトの目的である防災教育と、思い出に残ったホームステイ先でのことを述べようと思います。

現地で行なった防災教育では、実際に劇をやると笑いを狙ったところが通じないなど、改善するところがいくつかあり、一回の授業が終わるたびに話し合いました。そうしていくうちに子どもたちは真剣に聞いてくれて、クイズの正解を言うと「なるほど」と納得した様子で先生方もうなずいているのを見ることができました。「国際参加プロジェクト」で防災教育という目的があるのは素晴らしいことで、その目的があってこそメンバーが一つになれたのだと思います。ニアスの子どもたちのためを思って、自分は何をすればいいかと、準備段階から自分の活かし方も学ぶことができました。

ニアスでの活動の間、お世話になったホームステイ先はイヴ（お母さん）と中学生の娘のメガちゃんの2人家族でした。ホームステイ先の家に移動して到着した瞬間、「ここは日本ではない。だから私の家族もいない。メンバーとはそれぞれ違う宿泊所で、まさに一人だ」と実感したのを覚えています。孤独で寂しいという思いよりも「一人だ」ということを実感するだけでした。そこから私は「決して迷惑な存在にならないこと。できる限りのことをして、喜んでもらおう」という気持ちが心の底から湧いてきました。そして、この気持ちがあったからこそ現地で楽しいプロジェクト生活を送れたのだと思っています。それで、私にできたことは「たとえ挨拶一つでも心をこめてすること。たった一言の呼びかけでもしっかり理解しようとする事」など、本当に小さなことでした。

大切なのは家族たちや、他にも先生方、仲間たちなど出会った人と話しをする中で、自分の考えを「伝えたい」と思う気持ちと、相手の言っていることを「理解したい」と思う自分の意思の強さだと感じました。その人のためを思って働きかけること、ここに私なりのポジティブ思考の源があると感じました。

振り返れば、「国際参加プロジェクト」は大学での事前研修から現地での実践、そして帰国に至るまで、すべてにおいて達成感と充実感のあるもので、おおきく勉強させて頂きました。この「国際参加プロジェクト」の経験が、ただ「参加した」の一言で終わらないために、今後はインドネシアに関する知識を高め、そして学ばせて頂いたことを、活かし

ていこうと思っています。

学長先生をはじめ、後援会の皆様、先生方、そして共にすごしたメンバーたち、ニアスのイブ、メガちゃん、「国際参加プロジェクト」に携わるすべての方に、貴重な体験をさせて頂いた感謝の気持ちを感じています。ありがとうございました。

### 与えることで与えられた



「何か、喜んでもらいたい」、「何か役に立ちたい。」そんな気持ちがホームステイ先でも私自身を動かす原動力でした。午前で小学校での防災教育の活動が終了し、午後は主にホームステイ先で過ごす生活でした。

私はまずトロンチョンと呼ばれるウクレレが家に置かれてあったのを見つけ、そして弾き方を教わり、そこからはニアスの歌、ニアスのキリスト教会で歌われている歌を、トロンチョンをひきながら家族と歌いました。そして私も、「カントリーロード」の歌を教えてあげると、興味をもってくれ、たくさんの歌を歌ってすごしました。

初めてイブ（お母さん）と出会った時、私は「ニアス語を教えてください」といいました。そして私が出されたお菓子を口に入れようとした瞬間に、ずっと黙っていたイブが「マカン（食べる）」といきなりしゃべりだしたので、2人で爆笑。

ある時はイブの友達が話していたニアス語を私に教えてくれたりしました。一方、一人娘の中学生のメガちゃんに何故か「危ない」という日本語を教えると言われ、教えてあげると、そこから「危ないこと」についてよく話をしました。例えばトラックが荷台のドアを開けたまま普通に走っていたことや、ドアの戸締りをしていないと泥棒が入ること、絵や辞書を使ってなんとか説明をして、最後にニアス語の危ないという意味の「モシフォウ」をつけると、流行語をしゃべるように盛り上がりました。ホームステイ先で嬉しかったことは家族の皆と別れる時、メガちゃんに「私のお姉ちゃんになって」といわれたことです。初めてホームステイ先に移動する際に、スーツケースを持ってくるのを忘れていたり、朝はせかせかしていたりと何一つ「姉」らしくしたことはないのに、私自身も妹ができたように嬉しく感じました。（西峰）



## こころの豊かさ

岡本 望穂  
(欧米 英米 3年)



まず初めに、私はこの「国際参加プロジェクト」のメンバーの一員としてインドネシアに行かせていただき、経験という貴重な宝物をいただいたことに心から感謝致します。

私はニアス島入り初日に熱中症で倒れてしまいました。そんな私にとってニアス島での前半は、初日から健康管理ができなかった自分への憤りと、活動ができずメンバーに心配と迷惑をかける結果を招いてしまったことへの罪悪感でいっぱい、自分のモチベーションを保つことで精一杯の毎日でした。ホームステイのファミリーに会いたい想いと体調が不安な現状の間で泣いていたある夜、ホストファミリー先の子どもが2人、私を気遣って暗い夜道をわざわざ歩いて会いにきてくれるという出来事がありました。一生懸命話しかけてくれる2人と過ごした時間の中で、ニアス島で私を待っていてくれる人たちがいることに気づかされ、落ち込むばかりの日々だった私に「今の自分にできることをしよう」という活力が湧き上がってきました。その夜から夢中でオリジナルのインドネシア語帳を作ったり、折り紙を折ったりしました。「言葉もろくに通じなかったのに、こんなにもパワーをもらえたのだから、どうにかして私もお返ししたい」と思った翌日からホームステイ先に訪問し、残りの3日間を一緒に過ごさせていただきました。電力が安定していないため、家族で折り紙を折りながらロウソクを囲んで過ごした一家団らの夜は私にとって何物にも代えがたい貴重な時間となりました。テレビもゲームも音楽もない空間にただただ笑い声と笑顔だけがあふれている光景を見ていて、私はそこに、物の豊かさだけでは決して作ることのできない心の豊かさを身をもって感じました。

今回の活動のメインであった「防災教育」についてですが、正直なところ私が予想していた以上のできだったと思います。私たちの班は、地震・津波発生の仕組みについての教育が担当だったので、内容的にはもう一方の避難の仕方に比べると難しく、対象としている小学生に分かってもらえるようなレクチャーができるかどうか、企画の時点から不安でした。いかにして子どもたちの興味を引き、分かりやすく、楽しい防災教育ができるのか、何度も台本を書き換え、試行錯誤の末に完成はしたものの、やはりインドネシアで実演するまでは中途半端なものになっていないかと不安でいっぱいでした。メダンの孤児院ではじめて実演した日、私たちの班は様々な課題を見つけることができました。完成度の低さに納得のいかない私たち班員は夜の反省会で改善点を話し合い、みんなでもっと団結することを確かめ合いました。防災教育の回を重ねるごとに着実に完成度が上がっていくのが目に見えて分かりました。その中で、レクチャーに必死だった自分の中に徐々に周りを見る余裕をもてるようになり、子どもたちの反応に目が届くようになったとき、はじめて「楽しい」と思えました。そして、その頃になって、「まずは、やってる自分が楽しまなくちゃ、

子どもたちに本当に楽しんでではもらえない」ということに気づき、自分の活動姿勢をまた見直すことができました。そして、何よりも「笑顔」の大切さを実感することができました。言葉が通じなくても「笑顔」がただそこにあるだけで幸せな気持ちを共有することができる私はインドネシアで学びました。

最後になりましたが、「国際参加プロジェクト」という素晴らしい機会を与えてくださった地域文化研究センターの先生方をはじめ、様々な面でサポートして下さった一般参加の皆様、インドネシアでお世話取り下さった現地の方々、活動を共にしたメンバーのみんな、そして日本から応援してくれていた家族に心から感謝いたします。今回の経験を無駄にする事なく、これからの人生に活かしていこうと思います。ありがとうございました。

### 異文化を感じた喜縁伝愛

私は、今回インドネシアのホームステイ先に滞在して、異文化をたくさん感じました。お父さんとお母さん、子どもが5人の7人家族。でも、常に親戚の3人の子どもがいたので、10人でワイワイ、ガヤガヤ騒がしい家族でした。

まず、私の家の子どもたちは、私の持つものを見るたびに「それちょうだい」と何度も言ってきたので、それを毎回断るのに大変でした。また、ニアス島では毎夜のように、たびたび停電が起こって、日本では考えられないことだなと感じました。しかも、ロウソクを探しても見つからなかったので、先生の宿泊するホテルの部屋でマンディ(水浴び)をしたこともありました。

家族にしたことといえば、料理を作ったことです。献立は、皆から好かれるカレーと日本の朝食の代表である味噌汁です。しかし、味噌汁はとても不評で沢山残ってしまいました。カレーは材料の買い出しから苦戦しました。まず、鶏肉がどこにも無かったこと、それに、人参も人の指ほどしかない細い人参しかなくて、結局、具はジャガイモと細い人参と豚足を買いました。「さあ、作ろう！」と、さっそく材料を切ろうとして貸してもらったのが、包丁ではなく斧…鍋を貸して欲しいと頼むと中華鍋…火は直火で調節が大変……おまけに最後は、長い停電……もう、何度か挫折そうになりました。でも、嬉しかったこともあり、ルー以外の材料費が10人分も買ったのに1000円ほどで済んだこと。そして何より、カレーを皆がおいしそうに、嬉しそうに食べてくれて、その笑顔で今までの苦労が吹っ飛びました。

折り紙もしました。兎、犬、狐、帽子、チューリップなどいろいろ折りました。折り紙という文化がインドネシアでは無いせいか、大変興味を持ってくれました。

別れの朝、子どもがジャランジャラン(散歩)しようといって、見晴らしのいい高台に連れて行って来て絶景の朝日を見せてくれました。登るのはけっこう大変でしたが、その景色に感動して今までの1週間の出来事が走馬灯のように駆け巡りました。大変で辛いことが多かったけど、日本では体験できないことばかりで、とてもいい経験になりました。(岡本)



# NIAS 2007 ! また絶対行く！！

渡邊 麻子  
(欧米 英米 3年)



私は昨年できなかったことを達成するためとニアスの家族との再会を夢みて、今年再度「国際参加プロジェクト」に参加することにした。

久しぶりのニアス島は昨年より建物がだいぶ復興していたが、何も変わってなくて、少しほっとした（ニアスの人で発展を望んでいる人がいるかもしれないが。）今年も昨年と同じ所にホームステイさせてもらった。Ibu(お母さん)とBapak(お父さん)は昨年同様、温かく迎え入れてくれた。高校3年生と高校1年生になった妹たちは少し女らしくなっていたし、中学2年生と小学6年生と小学2年生の弟たちは身長がだいぶ伸びていてびっくりした。去年は難しかったトイレや mandi(水浴び)にはもう慣れたもので、食事もみんなおいしく頂いた。昨年よりはインドネシア語で、自分の家族や大学のこと、ニアスや宗教のことについて話せた気がする。「もっといっぱい話したい!」と思った。近所の子どもたちもみんな成長していて元気そうで何よりだった。昨年同様、学校から帰ると、私のことを「oneichan!!」と呼んでくれ、暗くなるまで大きな子も小さな子もみんな一緒に遊んで、21才の老体はへトへトにされてしまった。子どもたちの中に、エリカという小学校3年生の女の子がいる。彼女はうちに遊びに来る時は必ず赤ちゃんを抱いてくる。みんなが遊んでいる時も、赤ちゃんのお守りをしている。一度私がその赤ちゃんを抱っこさせてもらった時、その子は家に走って帰っていったから、「どうしたのかな?」と思ったら、1枚の布を持ってきて、私のひざの所に敷いてくれた。赤ちゃんがおしっこした時に私がぬれないように。うまく言葉にできないけど、とにかく彼女にすごく感心した。いろいろ考えて、感じて、思ったことは、やっぱり私はニアスが好きだということだ。人びとが温かくて、鶏がかけずり回っていて、ごみはいっぱいだけど、海がきれいで、自然が多くて、みんなのんびりとしていて、何よりも子たちの目が輝いていてきれいだ。いいところだなあと再確認した。そう、私はすっかりニアスに惚れてしまっているのだ。そこに家族がいるなんて、なんて素敵なことだろう。帰る前の日、お母さんが『sebelum kau pergi (君が旅立つ前に)』という歌を歌ってくれた。泣かされてしまった。うれしかったし、「また必ずここに戻って来る!」と決心した。

今年の「国際参加プロジェクト」は、防災教育をするという大きなミッションに取り組んだ。研修の始めに京都大学のKIDSの防災教育のデモンストレーションを見せてもらった。完成度の高さに感心し、驚いた。それと同時に、京都大学とはいえ、同じ大学生にこんなことができるのかというショックと、果たして私たちにできるのだろうかという不安でいっぱいになった。それから、「いいものを作りたい!」、「ニアスの子どもたちの少し

でも役に立ちたい！」と毎日みんなで獅子奮迅の勢いで頑張った。劇の台本作りや背景、小道具作りの準備を進める中で、みんなで悩んだり、意見を出してぶっかったり、こんなものでいいのかという心の中の葛藤が何度もあったと思う。でも自分たちで限界のハードルを作りたくなかったから、手探りでもがむしゃらに何とか形にして、インドネシアへと旅立った。しかし、そこでまず待っていたのは孤児院と北スマトラ大学、さらにニアス島初日での目を覆いたくなるような失態であった。あまりよく分からないストーリー展開に加え、まったく分からないインドネシア語に孤児院の子どもたちはポカーンとしていた。大学生は楽しそうに見てくれていたが、半ば何だこれはといった感じであったと思う。ニアスの子どもたちも私たちの想像とはまったく違った反応であった。正直、もう帰りたくなった。「いったい何しにきたんだ!」、「何が国際協力だ!」、「何がボランティアだ!」、「他者への献身なんてちゃんちゃらおかしいぜ!」と思った。確かに一生懸命やったし、できることはやったかもしれない。でもそれはただの過程であって、結果がこれではあんまりだと思った。恥ずかしくて、情けなくて、泣きたくなった。しかし考えてみると、この短時間で専門家でもない私たちに何ができるというのだろうか。大それたことはできないだろう。それなら、私たちができること、私たちが今できることをしようと思った。それしかもうできなかった。そして、リーダーを中心に1回1回ミーティングを重ね、悪いところを改善していった。回を重ねるうちに、少しずつ良くなっていったと思う。みんなの気持ちは一つ、「伝えたい」、「楽しませたい」だった。子どもたちは真剣なまなざしで私たちを見つめ、クイズには積極的に参加してくれ、復唱はこれでもかといわんばかりに大きな声で叫んでくれた。教室に入りきれない子どもたちも窓からチョココンと覗いてニッコリしている。劇の最終日、劇が終わるとみんな汗だくになった。みんな満足そうだった。防災についてちゃんと伝えられたとは思わないし、完璧だったとも思わない。でも、心は満たされた。自己満足だと思ったが、子どもたちのその笑顔に救われた。ありがとね。

今年の「国際参加プロジェクト」は明らかに昨年より進歩していると思う。このプロジェクトのことを、途中でただの異文化体験プロジェクトだとか大学生のお遊びプロジェクトだとか思ったりしたけど、決してそうではない。先生方やいろいろな人びとの協力で成り立っているプロジェクトであって、いろいろな思いが込められていて、生半可なものではないと感じた。参加したメンバーにとっては大学時代の大きな経験になっているだろうし、将来何かをする出発点になっていると思う。何よりもこのプロジェクトによって、私の人生は大きく変わったと思う。このプロジェクトを通して、大学に行く意味を見つけられた気がする。一緒にいったメンバーには本当の自分を出せたとし、共通の目標を持って、それに向かってがんばることができた。もしプロジェクトに参加してなかったら、大学4年間そんな友達は絶対できなかったと思う。メンバー、先生方ならびにすべての方々に Terima kasih banyak!! (本当にありがとうございました!) そして、お母さん、お父さん、すてきな体験をさせてもらって幸せです。感謝しています。ありがとう。最後に、ニアスの子どもたちのようなすてきな笑顔が世界中にあふれますように!!

## インドネシアの温かさ！

中山 卓己  
(人間・宗教学2年)



私は昨年に引き続き、今年も「国際参加プロジェクト」に参加しました。私は、去年インドネシアに行き、人の温かさ、宗教の素晴らしさ、助け合うということ、を学ばしていただくと同時に、ストリートチルドレンなどの、社会問題も見させていただきました。私が2年連続参加した第一の理由は、将来、国際協力関係の仕事につきたい、そして、海外の困っている人を助けさせていただきたい、と思っているからです。そして、第2の理由として、あの温かいインドネシアの人たちや元気いっぱいの子どもたち、また、去年お世話になったホームステイのファミリーに会いたいと思ったからです。今年のインドネシアは正直、まったく昨年と変わっていませんでした。インドネシア独特の匂いやど派手なミニバス、温かい人たち、本来車が走るところを走っているベチャ、そして、紙のないトイレ（笑）。孤児院の子どもたちは、地震などで親を亡くしてしまったので、孤児院にいます。だから本当は、私たちが子どもたちを元気づけてあげないといけないのに、逆に元気を分けていただきました。この子どもたちの元気はどこから来るのだろうと思いました。また、メダンにいるときに、昨年メダンでお世話になったホームステイ先のお父さんが、どこからか、私がメダンにいるという情報を聞きつけて、わざわざ、ホテルまで会いに来てくれました。そして、「今日は私の家に泊まってください！」とってくださいました。なんて温かい家族なんだろうと感じました。私は、本当にしみじみとインドネシアの人たちは温かいと感じました。私は今度自分1人でも良いので、メダンのお父さんの所に行ってホームステイしたいと思います。

今回のインドネシアでは、地震の防災教育を劇という形で行ないました。準備し始めた時は、人が集まらず、難しいインドネシア語を丸暗記しなければならないので、本当に難しく、大変でした。私たちの班は地球の仕組みや地震、津波は何故起こるのかということ、インドネシアの子どもたちにも人気のあるドラえもん、孫悟空、ピカチュウなどに扮して説明し、簡単なクイズを一緒に解いていくというものをしました。準備の時は本当に大変でどうなるかと思いましたが、本番、回を重ねていくにつれて、みんな、インドネシア語も上手になり、劇もスムーズになっていったように思います。見てくれた真剣な子ども目が印象的でした。この防災教育は大変価値のあることだと思います。なぜなら、この防災教育のことを少しでも子どもが覚えていれば、人の命を救えるものになると思うからです。私は、この活動を通して、防災教育は難しいけど大変価値のあるものだと感じました。この活動は、今後の自分にも生きてくると思います。

私は、今回も逆に本当にたくさんのことを教えて頂いたと思います。私はこの貴重な経



験を生かし、将来、海外で困っている人を助けさせていただき、共に「勇み勇ませ合う」という夢に向かって一歩ずつ歩いていきたいと思います。本当にありがとうございました！

### 異文化体験

ニアス島でのホームステイ先。初めはドキドキしましたが、家族の皆さんが温かく迎えてくださりました。おかげで、安心してくつろぐことができました。家族構成はイブ（お母さん）と長男、次男で、隣に従兄弟の家族が住んでいました。ホームステイ先ではたくさんの異文化を体験しました。

食事は基本的に全部辛く、けどその辛さがたまらなかつたです。果物の王様ドリアンは、初めて食べた時、餃子の香りがして、プリンみたいな味がしました。けど、食べていくにつれて、めちゃめちゃ甘くおいしくて、はまりました。トイレは紙がなく、トイレの後は手でおしりを洗うそうです。初めはちょっとびっくりしましたが、ちょっとずつ慣れていきました。風呂はマンディと呼ばれるもので、浴槽に溜めた水で体を洗ったり、頭を洗ったりしました。これも、しばらくしたら慣れて、むしろ快感でした。

そして、この毎日の中で、宗教を身近に感じさせていただきました。ホームステイ先の家族はみんな、熱心なクリスチャン（プロテスタント）で、起きてすぐと、寝る前に、お祈りをします。また、毎週日曜日には、近くの教会に行き、祈りの歌をささげます。私は、日曜日の教会への参拝に一緒に行かせていただきました。教会の前に行くと、リズムカルな音楽と共に、祈りの歌が歌われていました。みんな、表情が真剣で本当に宗教と共に生きているんだなあと感じました。ホームステイ先の家族に会えて本当に良かったです。（藤本 / 中山 / 東）



# ニアス島の子どもたちに ありがとう

東 祐作  
(アジア インドネシア 2年)



僕は地震・津波のしくみについて子どもたちに教える劇のグループに入っていました。最初、人がなかなか集まらなかったのであまり練習できませんでしたが、留学生が発音をみてくれて、とても助かりました。台本を作成するのはとても苦労しました。何度も訂正をしました。最後には本当の台本が作成できて良かったと思います。誰がどのセリフを言うのかもすごく考えました。僕は毎回研修に参加していましたが、他のインドネシア語コースの人にももう少し劇の練習に参加して欲しかったです。劇のフリはとても難しかったです。でも練習してなんとかできるようになりました。

ニアス島では、まずモアウォ小学校を訪問し、防災教育をしました。僕のいたしくみ班の人は体調不良だったので、とても残念に思いました。セリフは少し早かったけれど、声は出ていたと思います。台詞を覚えるのが難しかったです。特に発音が難しかったです。僕は台詞が飛んでいることに気づかず、そのまま台詞を読み続けてしまいました。サエヴェ小学校でも同じ防災教育をしました。その日は2名体調不良の人がいましたが、他の人はみんな元気になって防災教育をしました。声もよく出ていたし、ニアス島の子どもたちは防災活動のことをよく理解してくれたと感じました。ニアス島の先生たちにほめられたし、防災の重要性を伝えられたと思います。

4人家族の家にホームステイをしました。ホームステイ先の家族はとても親切にしてくれました。夕食には魚、唐辛子、白御飯が出ました。魚がとても固くて、唐辛子は辛かったです。御飯は美味しかったです。風呂は湯が出ず、マンディ（水浴び）をしました。体が冷えました。しかもシャワーが付いてないことに僕はびっくりしました。夜は真っ暗になり、トイレへ行くのが大変でした。夜、1人で寝る予定でしたが、少し不安に思ったので、結局日本人3人で寝ることになりました。インドネシア語コースの人とも一緒に一つのベッドに寝たのですが、窮屈で全然眠れませんでした。

ニアス島の生活は厳しかったけど、貴重な体験ができて良かったです。ホームステイ先の家族に親切にしてもらって、とても感謝しています。最後まで劇を見てくれたニアス島の子どもたち、どうもありがとう。Terima kasih!

(\*インドネシア語コース海外文化実習として参加)

\*東くんの「ホームステイ先の喜縁伝愛」は p.56 (隣のページ) に掲載してあります。

そちらをご覧ください。

# TERIMA KASIH PULAU NIAS

菊池 文也  
(アジア インドネシア 2年)



私が今回「国際参加プロジェクト」に参加した動機は、現地の人々と共に暮らしながら、現地の生活の流れや人々の性格を学ぶためである。また防災訓練を通してインドネシアの人々に地震が起こったときの対処方法を学んでもらい、少しでも国際協力に貢献できたらとの思いからである。

私は海外そのものが初体験であった。いざインドネシアに到着すると、あまり日本と変わらないじゃないかという印象を受けた。しかし、メダンを経由し、ニアスに到着する過程の中で印象がだんだんと変わり、これから大丈夫なのかな、と少し不安に思い始めた。

初日はホームステイ先との初対面が行なわれた。まず、モアウォ小学校の校長先生の家でホームステイをした。そこで初めてドリアンを食べた。2日目からは、中学生のアレフ君のいる、イファンさんの家にホームステイすることになった。いざ家に入ると、アレフ君だけでなく子供がたくさんいるのを目にした。最初は、全く言葉がわからなかったため、だれがアレフ君かわからなく、途方にくれていた。その謎は、夜に他の家の子が帰ったことでわかった。文化の違いを感じた。

防災教育も始まり、日に日によくなっていってると先生方が褒めてくれていたが、一回一回、無我夢中だったため、あまり実感できなかった。最後のサエヴェ小学校の防災教育が終わった時点で、張り詰めていたものがきれたのが自分でもわかった。その夜から熱が出ていたため、ホテルに泊まることになり、翌日のお別れ会にも参加できなかったことは大変残念であった。体調が悪かったため、お別れ会の前の夜にイファンさん家族とお別れをすることになった。体がとてもしんどかったため、その時は悲しさ、寂しさは湧き上がってこなかったが、ニアスを離れる飛行機の中で徐々にこみ上げてきた。

現地で過ごした1週間はあっという間に過ぎた。お風呂に入るにも冷たい水、紙の置いてないトイレなど、日本にいる時とは、全く勝手が違う生活に直面したことや、夜中まで近所の人々とギターを奏でながら歌を歌ったこと、朝5時から早朝ランニングをしたことや、空180°広がるきれいな星空を子どもたちと見たこと、陽気なお父さん、お母さん、せっかちだけれど面倒見のいいお姉さん、元気なアレフと出会えたこと、毎日が新鮮で、発見の連続であった。しかし、そのような楽しい毎日の中でも貧富の差は少し見受けられた。私の思い違いであればよいのだが、貧しそうな家の子どもで、10歳くらいの年頃の少年はどこか控えめであった。小学校1年生のクラスでも、10歳くらいの子供もいた。インドネシアの文化はまだまだ、私の知らないことばかりだと感じた。この体験が出来て本当に良かった。これは私の心の中で生涯の財産になると思う。この体験のおかげで、来

年は留学したいという思いがより強くなった。これから、より勉強をしっかりともう一度ニアスを訪れたいと思った。

最後に、「国際参加プロジェクト」を支えてくれた先生方、高藤さん、聴講生の皆様方にお礼を申し上げたい。どうもありがとうございました。

(\*インドネシア語コース海外文化実習として参加)

### 笑顔は素晴らしい

僕たちはニアスでのホームステイ先が同じでした。家族と共に過ごすなかで、僕たちは家の前の庭で、家の子どもや近所から来る子どもたちとサッカーをして遊んだり、日本料理でチャーハンをつくってあげたりしました。

「伝愛」できたなと思ったことはサッカーのことです。子供たちのサッカーのやり方は、チームに分かれて試合をするか、敵味方のないただのボールの取り合いをするかのどちらかでした。しかもその庭はグラウンドのように広くなく、すぐ横には道路があり車が走っているので、サッカーをして遊ぶには少し狭く、危ない状態でした。そこで僕たちは、狭い場所でもできるサッカーゲームを教えることにしました。ゲームといっても試合ではありません。そのゲームは「ボール回し」や「鳥カゴ」などと呼ばれているゲームで、そのやり方は、まず鬼と呼ばれるボールの奪い役を決めます。そして、その鬼の周りに円を作り、円を作った人たちは鬼にボールを取られないように、パスを回します。もし、鬼がボールに触れたり取ったりすれば、取られた人と交代し再開するというゲームです。円の中だけでボールが回り、奪い合いが行われるので、狭い場所でも危なくないのです。子どもたちへの説明は大変でした。なかなか伝わらず、言葉とジェスチャーの説明に時間はかかりましたが、実際にやってみるとすぐに子どもたちは理解してくれました。

嬉しかったのは、その後日のことでした。子どもたちは自ら、教えたゲームを僕たちがいなくてもやってくれていたのです。無邪気でとてもかわいかったです。そして日本からもってきたチャーハンの素で、チャーハンをつくってあげたりもしました。材料はなんと卵だけの挑戦です。家族たちはごちそうすると「エナッ（おいしい）」と言って残さずに全て食べてくれました。

ホームステイ中、思い返すと家族の皆はいつも笑顔で、僕たちに接してくれました。サッカーの遊びも「伝愛」できましたが、みんながいつも笑顔でいてくれたことが僕たちにとって一番ありがたく、嬉しかったです。(北/菊池)



# 人と人のつながり

新井 真未  
(アジア インドネシア 1年)



インドネシアで過ごした2週間は本当にあっという間だったような気がします。しかし一日一日の内容はすごく濃いものであり、毎日が新しいことの発見で、すごく充実していました。日本に帰ってきてからは、ずっとインドネシアでの思い出に浸り、プロジェクトに参加したメンバーに会うたびに「またインドネシアに行きたいな〜」と連発していたように思います。

行く前から何よりも楽しみにしていたのは、ニアス島でのホームステイです。帰ってきて、インドネシアでの日々を振り返ってみても、やはりホームステイが一番の思い出です。ホームステイでは、現地の人びとの生活を身近に感じることができ、また、このホームステイを通して、社会の見方や物の考え方もずいぶん変わったように思います。シャワーもお湯もない濁った水のお風呂に、トイレットペーパーのないトイレ…。日本にいる限り決して経験のできないことばかりです。その一つ一つがすごく新鮮で、良い経験をしたなと思います。お父さんもお母さんもすごく優しい人たちで、くしゃみをしただけで「大丈夫？薬飲む？」と本当に自分たちの子どものように気にかけてくれました。子どもたちもご飯を食べ終わると、毎日のように「日本語を教えて」と言って、ノートとペンを持ってきては質問攻めです(笑)。それがとても楽しく、言葉の壁など全然感じられませんでした。

ニアス島で生活する中で一番身に感じたことは人と人とのつながりです。一人で道を歩いていると、あちこちの家から「ありがとう」という言葉が飛び交って来たり、家の前に椅子を出してきては「ここにすわって」といって呼び止められて雑談したりしました。また、家の庭で遊んでいると、どこからともなく近くの子どもたちが集まって来て、とにかく皆、とてもフレンドリーで温かい人たちばかりでした。私はこういった人と人とのつながりってすごく良いなと思いました。

今回、私たちは防災教育を目的とした活動を行ないましたが、普段の子どもたちの笑顔を見ていると、本当に地震や津波の被害に遭ったのかと思うほど、皆明るく、すごくパワーに満ち溢れていました。しかし、ホストファミリーが「jalan-jalan (散歩)」で連れて行ってくれた浜辺の近くで、太いパイプみたいなものと大きな石ががんじがらめになっているのを見たときに、お母さんが「これは津波の力で勝手にこんな風になったの」と教えてくれ、やっぱり津波の被害にあった場所なんだと改めて認識しました。またその夜、もともと住んでいた家が津波によって壊されたということや、今住んでいる家は仮の家で本当の家ではないということなど、地震のときの話をたくさん聞かせて貰い、今回私たちが行なった防災教育がいつか役にたてば…今じゃなくても、10年…50年…100年たった将来にも、

この防災教育の内容が受け継がれて、少しでも被害が少なくなればよいと思います。

最後に、このプロジェクトを企画してくださった先生方、スタッフの皆さん本当にありがとうございました。プロジェクトのおかげで普段できない貴重な体験をすることができました。また、ほとんど初対面だったメンバーとも最終的に団結し、大きな目的を成し遂げられてすごく嬉しいです。みんなに感謝の気持ちでいっぱいです。皆さん本当にありがとうございました。また必ずインドネシアに戻りたいです。

### 家での異文化交流



今回、私はニアス島でホームステイを体験させて頂くことができました。私のホストファミリーの構成は、Bapak(父)、Ibu(母)、長女、次男と従姉妹の女の子2人の計6人家族でした。ホストファミリーが紹介され、今まで一緒にいた仲間たちと別れて、ホームステイ先に向かいました。その時、子どもたちが私にいろいろと話しかけてくれました。しかし、言葉が全くと言っても良い程理解できず、とても不安になりましたが、家に着いて自己紹介を終える頃にはそんな不安も吹っ飛んでいました。そして子どもたちに誘われるままに「jalan-jalan(散歩)」に出かけ、近所の家の前で指差し会話帳を駆使しながら、たくさんの人と色々な話をしました。今思うと、ほんとにつたないインドネシア語でよくあんなに会話できたなと思います。

また、日本からのお土産として甚平や足袋、日本のお菓子を持っていきました。その中でも子どもたちに人気だったのは折り紙で、手裏剣を作ってあげるとすごく喜んでくれました。夜になるとお母さんがインドネシアの歌をいろいろ歌ってくれ、歌詞や歌の意味を丁寧に分かりやすく教えてくれたりしました。毎日食べるご飯もすごくおいしく、ずっと「enak sekali(とてもおいしい)」と言っていたように思います。そして手で食べるご飯は、スプーンやフォークを使って食べるよりも数倍おいしく感じられました。しかしドリアンだけはどうしても食べられず、独特な匂いと何とも言えない粘り気のため、一口かじっただけでギブアップでした。そしてトランプの「ばばぬき」や「神経衰弱」をホストファミリーは知っていなかったのも、つたないインドネシア語で何とかルールを説明し、皆でトランプを楽しみました。またある夜は、テレビで全日本のサッカーの試合が放送されており、サッカーを観るのが好きな私はテレビの前で食い入るように観ていました。すると、お父さんと弟も「サッカーを観るのが好き」と言って、一緒に日本のチームを応援してくれました。そのとき、共感ももててすごく嬉しい気持ちになりました。

数あるホームステイ先の中から私がこの家に行くことになり、この家族と出会えたことも何かの縁だと思います。だからこれからもできる範囲でホストファミリーと交流していけたらいいと思います。(新井)

# 知らない世界を見てみたい

平野 洸

(アジア インドネシア 1年)



私がインドネシアから帰ってきてまず思ったのは、「インドネシア語の勉強、めちゃくちゃ頑張ろうっ!」ということです。インドネシアで、いろいろな人に出会いました。大学で日本語を学んでいるという人もいましたが、ホストファミリーを含めほとんどの人はインドネシア語もしくは英語でのコミュニケーションでした。インドネシア語では指差し会話帳で、英語では単語をカタコトで… (私の英語力が乏しいため)。当然自分の気持ちの半分も伝えられませんでした。特にホストファミリーとはもっといろんなことを話したかったなと思います。そんな私に、インドネシア語や英語を自在に操る先生や先輩が凄く格好よく見えました。私は今秋からインドネシア語を勉強します。そして絶対もう一度インドネシアへ行きたいです。そしてファミリーに会ったとき、自分のことや家族のこと、ホストファミリーのこと、日本のこと、今度はもっといろんな話をしたいです。

今回のプロジェクトでは防災教育をメインに活動し、地震や津波の起こり方、避難の仕方を教えました。防災教育の本番は現地での活動でしたが、日本での準備段階から学ぶことは多く、とても良い経験になりました。自分自身が知らないことも多かつたし、外国語で分かりやすく伝えることの難しさも実感しました。どうやったら子どもたちを惹きつけられるのか、より伝わるのか工夫しながらやるのは大変でしたが、改良後に劇中で反応があったりするととても嬉しかったです。現地では日本での事前練習とは全く環境が違いました。インドネシアらしい急な時間や場所の変更、赤道直下の国での炎天の暑さ、体調不良での役の変更など大変なことがたくさんもありました。それでもやはり終わった後の達成感や充実感はその大変さなんか遥かに上回っていました。少しでも多くの人が理解を深め、将来役に立っていけば良いなあと思いました。

インドネシアへ行って「世界は広いな」と改めて思い知らされた気がします。今までも世界が広いなんてことは知っているつもりでいました。でも私が思っているよりももっと世界は広くて、知らないことが溢れているのだと思いました。例えばカカオの中身が白くて甘いなんて知らなかったし、インドネシアがあんなにさわやかな暑さで日本がこんなに蒸し暑いなんて思いませんでした。また、訪問した大学で日本語を専攻している男の子と話をした時「私は日本の静岡の大学に留学したいです。静岡はどんな所ですか?」と聞かれました。私は「緑茶の産地として有名で、富士山があります」などの簡単なことしか答えることができませんでした。世界を知ること大切だけど、まずは自分の住む日本のことももっと理解したいなと思います。もちろん世界の隅々を知ることが不可能だけど、これから積極的にいろんなものを経験したいです。

今回インドネシアへ行って、インドネシアが大好きになりました。そしてそれ以上に自分の生まれた日本のすばらしさも改めて感じ、日本に生まれて良かったと思いました。日本の中では気づけないこと、知ることができないことを沢山得ることができました。こんな素晴らしい経験ができたのも、家族、プロジェクトのメンバー、先生方、日本や現地で様々な形で援助してくださった方々、いろいろな人のお陰だと思えます。感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。

また絶対、大好きなインドネシアに、ニアスに行きたいと思えます!!!

### 縁ヲ喜び、愛ヲ伝エテモラッタ

ホームステイ先の家族たちは、インドネシア語も英語もできない突然やってきた私を、本当の家族のように温かく迎えてくれました。もちろん言葉の壁はとても大きなものでしたが、言葉が通じなくても心を通わせることができました。つまり言葉の壁なんて簡単に越えることができるということを実感しました。貰ったものはたくさんありますが、私が愛を伝えてきたのかどうかは未だに分かりません。ただ1週間一緒にご飯を食べ、笑って、悩んで、寝てきました。正直、何もしてこなかった気がします。唯一愛を伝えたことといえば、帰るときに手紙と一緒に家族の人数分の鶴を折って置いてきたことです。みんなの健康と幸せを祈って、私の精一杯の愛を込めて折りました。果たして伝わったのかどうかは分かりませんが…。

でもこの家族に出会えたことは私の人生にとって大きな財産で、この縁を喜び、感謝したいと思います。もう一度ニアスの家族へ会いに行き、今度は私が愛を伝えられたらいいと思います。

日本の家族、ニアスの家族、プロジェクトメンバー、友達、みんなみんな愛しています。すべての人と出会えたことに感謝です。これが私の喜縁伝愛。(平野)





# ティダ マウ プーラン

石田 賢人  
(欧米 イスパニア 1年)



「チャーペデェ〜…(疲れた〜)」って、いきなり言うと、このプロジェクトが疲れたように捉えられるかもしれないが、むしろ逆で、インドネシアから日本に帰ってきて、自由気ままなインドネシア時間から、せかせかした日本時間に慣れるまでが疲れたということである。それぐらいインドネシアは素敵だった。

その前に何故私がこのプロジェクトに参加したかという点を述べておく。将来の夢は、高校の時から NGO やユニセフといった国際機関に就いて海外で働きたいなあ、ということであった。しかし、実際にそういった活動には参加したことが無かったし、知識もあまりなかったので、とにかく大学生になったらいろいろな経験を積みたいと考えていたから、この「国際参加プロジェクト」に参加した。

今回のインドネシアでの一番の目的は、スマトラ沖大津波のような災害がまた起きてしまったときのための防災教育である。「災害を防止することは難しいが、軽減することはできる」という考えで、私たちは地震のしくみ班と避難班に分かれて、インドネシア語で行なうことにした。ちなみに私は避難班である。対象は小学生で分かりやすく正確に伝わるように、両方の組は劇のような形式で授業したのである。準備には莫大な時間がかかり、ほぼ毎日夜8時まで学校に残り、劇で使う道具や背景作り、インドネシア語の単語や発音の勉強をした。そしてインドネシアへ！一番初めの孤児院での発表は緊張もしたし、何より伝わっていなかった気がする…というのも、劇を見ている子の表情の「？」って感じが、ひしひしと伝わったからだ。それには反省する点があった。素人のインドネシア語なのに、声は小さく早口で、セリフをカンペで見たりして劇の流れが悪かった。こんな風にして私たちは、毎回の劇が終わってから反省会をして劇をより良いものにするように磨いていった。回を重ねるたびに小学生の反応や笑い声で、自分たちの劇が上達していくのが分かった気がする。そして、とうとうサエヴェ小学校での最後の発表。劇中で「アダ グンパ!(地震だ!)」の声と共に一緒に机の下にもぐる小学生。「ディシニ バハヤ、アヨ キタ クルアール(ここは危険だ。早く出ないと)」というセリフと共に教室から出ようとする小学生。クイズにも積極的に参加してくれて、理解できているんだ…伝わっているんだ!! と思って嬉し涙が出た。今までの努力が実った。ここまで成長させてくれたのは天理小学校、孤児院、スワダヤ大学、北スマトラ大学、モアウォ小学校、サエヴェ小学校、皆さんのおかげである。本当に良い経験ができた。

もう一つの大イベントはホームステイで、私のホームステイ先の第一印象は、とにかく「多い!」の一言だった。最初に行った時は、なんと15人ほどの子どもたちがいた。私

は焦って「クルアルガ(家族)」と叫んでいると、段々と数は減り5人になった(5人でも多いとは思ふ)。ここで兄弟を紹介すると、笑顔は天使だが私が抱くと泣いてしまう8ヶ月のノヴールくん、私からよく逃げる3歳のエルナちゃん、折り紙と鬼ごっこが大好きな7歳のノッフィちゃん、お母さんの手伝いで、あまり遊べなかった10歳のネルティンちゃん、私の身の回りのこと全てに気をかけてくれていた一番上の11歳のデッディくん、これが私の兄弟。すると、またさっきの子どもたちが戻ってきて質問の嵐…1日目は何を言っているのか分からなかったが、3、4日経つと耳も慣れ、子どもたちの簡単な質問ぐらいは聞き取れるようになっていた。心の底から「異文化交流に一番大切なものは言葉じゃなくて心」と感じた。私をここまで連れてきてくれたのは、29歳の優しいイヴ・デッディお母さんである。夕方頃に帰ってきたのはパパ・デッディお父さん。42歳でヒゲがあり、初めて見たときは恐そうな感じだったが、全く逆でお茶目で陽気な人だった。これが私のホームステイしたすてきな7人家族である。

ホームステイ先では、おもしろいことがいろいろあった。まずは私が持っていったお土産の60個ほどあった飴だが、20秒で消えた。その時は家族以外にも10人ほど親戚らしき人たちがいたからしかたがない…のか？ちゃんと配る前に一人2個ずつって説明もしたのに。でも、とても楽しい経験だった。ほかに、朝起きると朝食の前にビスケットと紅茶が出た。1日目だから気を使ってきているのだろうと思い、その日を終えた。2日目の朝はロールケーキとコーヒー、3日目の朝はパイのお菓子とミルク、さすがに気になり、パイのお菓子を持って「これは何？」と聞くと、パンと言われた。明らかに違うだろう…と私は文化の違いを感じた。それより毎朝、お菓子とティーを飲むことが日本よりどれだけ欧米化?!って、感じた。もっといろいろと楽しいことはあったけど、こればかりは自分で体験しに行かないと分からないと思う。本当に一秒、一秒が楽しく新しくボリュームのある一時。しかし、別れのときはすぐに訪れた。題名の「ティダマウプーラン」は「帰りたくない」って意味で、最後の日に子どもたちと一緒に何回も言っていた。今まで人と別れるだけで泣いたことは無かったけど、今回はこれほどの涙が出る自分や環境に驚くほどだった。ここに私の新しい家族ができた。

一番感じた文化の違いは「生きる」という価値観の違いである。日本の大部分の人々は必死にお金を稼ぐことだけを考えて生きている気がする。しかし、インドネシアの人々は最低限の生活ができれば良い、生きることを最高に楽しむ、そんな感じがした。初めは地震の仕組みや避難の仕方を教えに行こうという気持ちでいっぱいだったが、実際に行って教えたことより何十倍もの経験やスキルが身についたと思う。また、ホームステイ先の家族ももちろん好きだが、本当にインドネシアという国、インドネシア人が大好きになった。広大なインドネシアのほんの一部しか見てないかもしれないけれど、かけがえのないプロジェクトだった。本当にこのプロジェクトに参加できてよかったと思う。最高の仲間たちといろいろなサポートをしてくれた先生方や両親など、このプロジェクトに関わった全ての人々に「テリマカシー(ありがとう)」そして感謝。私の歩んでいく道——少し「ジャラン ジャラン(散歩)」してインドネシアに足を運んだけど、これほど良い経験ができると思わなかった。そして、私の次の目標が決まった。もう一度、インドネシア行き決定!!!

## 素敵な家族 (Wonderful family ≒ Familia maravillosa ≒ Keluarga hebat)



僕は子どもが大好きだ!!だから、このホームステイ先の家族にめぐり合うことができ本当に良かったと思う。最初着いたときは5人も子どもがいて「多いなあ～相手できるかな…疲れそうやなあ～」と感じていたが、過ごしていくうちに毎秒毎秒が楽しくて、あっという間の5日間だった。最初に、私たち

とホームステイ先の名前を呼んで顔合わせした後に、一緒に活動してきた仲間が別々のホームステイ先に一人ずつに分かれて行った。そのとき、自分は少しシャイで初対面の人だと人見知りしてしまう性格があり、また、言語の違いが余計にプラスされ、家まで連れて行ってくれるお母さんと15分間歩く中で一言も交わすことなく家に着いた。着いたときは、お父さんを除く家族以外に友達やいとこ関係で10人ほどの子どもたちがいて驚いた。何より、全員が家族だと思って、持ってきたお土産の数と比例しない人数で1人焦っていた。そして15人ほどの前で名前や年齢、住んでいる場所や家族構成など簡単な自己紹介をして、終わったと思ったら、便利で逆に大変になった指さし会話帳の対応に疲れた。同じような質問を子どもの数だけ(10回ほど…)受けてしまった。少しワイワイ、ガヤガヤした後、昼寝をしようとしたら10数人の子どもたちが押し寄せてきた…つまり、まあ簡単に言うとホームステイ中一回も昼寝ができなかった。こんな感じで、少し疲れたエピソードもあったが、おもしろい出来事もあった。

1つめは、お父さんが無邪気だったこと。子どもたち用のおみやげで、最初に子どもたちにあげた飴なのに、お父さんが一番初めに食べた。きっと先に味見で食べたのだと思ったけど、次に子どもたちにあげたけん玉も横取りして最初に遊んでいた…気のせいかなと思いつつ、最後に子どもたちにあげたシャボン玉も奪って一番に遊んでいた。確認という意味もあるかと思ったけど、何より一番、楽しんでた。2つめは、食事において全然「インドネシア」をさせてもらえなかったこと。辛い料理はでなかったし、から揚げや肉じゃがとか日本でよく食べそうな料理。また、皆が「ドリアン食べた?臭かったなあ～」みたいなことを言っている中、僕はロールケーキやクッキーばかりを食べていたこと。

まあ～何はともあれいろいろと気を使って頂いたり、優しく楽しい家族でした。特に長男のデッディとは食べるのも風呂も寝るのも一緒に、身の回りのことはいろいろとしてもらった…けど、ただ一つ、寝相が悪く1日目はベッドが占領されていて寝るのに苦労した。いろいろ大変でしたが、子ども好きの僕にピッタリなホームステイ先だった☆(石田)



# My precious memories

井元 僚  
(欧米 英米 1年)



将来的に国際関係の仕事に携わってみたいと思いながら僕は天理大学国際文化学部に入學した。正直、入学当初は天理大学が第一志望大学でなかった事もあり、天理大学での学生生活に全くといっていいほど期待していなかったが、この第7回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」の応募を見て「これや！」と思い、迷うことなく参加を決めた。参加費10万円という大金の額は高い出費であったが…。

約2ヶ月間の準備期間が始まり、時間のある者は毎日のように集まり、インドネシアでの防災教育の成功を目指して切磋琢磨しながら準備をした。やはり大学生になると自分の意見をしっかり持っている人がたくさんおり、そんな人たちが今回のプロジェクトに集まった。そのため、意見がぶつかり合うこともたびたびあったが、インドネシアへ行く日が近づくにつれて、皆、防災教育のリハーサルにも熱が入り、緊張感も少しながら出てきたように感じた。

初めての海外であるインドネシアに到着して最初に感じたことは、人がメチャクチャ多いことだった。そして、職を持っていない人が日本と比べてあまりにも多いこと…。あんなにまで日本と差があるなんて考えていなかったのだから、空港での荷物運び、路上での新聞売りなど日本では見ることのできない光景を見てショックを受けた。何よりもショックだったのは、バス移動中の信号停止時に窓ガラスを挟んで僕にお金を求めてきた子どもを見たときだった。テレビでしか見たことのない光景だったので、本当に辛かった。あれが途上国での現実だと考えると自然に涙が出てきた。それから「あんな子のために自分には何ができるんやろか…」と考えることが多くなった。

ニアス島での一週間のホームステイが始まり、ここでも日本ではできない経験をたくさんした。指差し会話帳を使いながらジェスチャーも交え現地の人と会話をしたり、一人で散歩をしてみているいろいろな人と出会ったり、自然の果物を目にしたりなど一日一日が新鮮だった。ニアスの人と話をしていると本当にオモロかったし、何よりも僕らに優しくかった。ニアスの人と交流を多くすることでニアス語もいくつか教えてもらった。ニアスでの挨拶全般に使える「YA'AHOWU（ヤホーブ）」を何回口にしたらろうか。使う毎にネイティブに発音が似てくるのを感じ、さらに外国語への興味も今まで以上に強くなった。

そして、2ヶ月の準備を経て防災教育の本番初日。途中、とにかく僕は緊張しまくって自分の台詞も忘れてしまった。子どもたち、先生方の反応などを含め全体的に見ても初日は点数で表すと50～60点ぐらいだったと思う。イントネーションの大事さもこの時に分かった。皆、「このままではダメだ」、「もっと防災教育をいいものにしたい」と思い、

毎回の反省会時には改善点を話し合った。そうすることで、日に日に子どもたちや現地の先生方の反応も良くなっていくのを感じることができた。防災教育最終日にはこれまでで一番出来の良い発表ができたと思うし、あの達成感は今まで感じたことがないほど、すがすがしい気分になった。

帰国後の今、インドネシアで感じたことを生かすために、今後大学生として力を注ぎたいと思うことは、授業や自主勉強を通しての語学力の強化、そして国際情勢を知ることなどであると思う。語学に関しては英語はもちろん、他にこのプロジェクトによって興味が強くなったインドネシア語を勉強することに決めた。今、授業以外で考えているのは、簡単なことではないが「ボランティア同好会を作りたい!」ということ。なぜなら、このプロジェクトを通してボランティアはホンマにすばらしいと思ったから。また、ボランティアに興味・関心がある人と知り合いたいから。そして、上に挙げたことを実行して、今回とは違う自分になって、学生の内にもう一度「国際参加プロジェクト」に参加したいと強く思う。

最後にこのプロジェクトを支えてくださった倉光先生、菅原先生&アミジョーさん、住原先生、澤山先生、高藤さん、黒岩さん、事務助手の中田さん、吉岡さん、留学生のアンギとデッタ、インドネシアで僕と出会ってくれた人たち、ほか本当にたくさんの方々のおかげだと思います。特に毎日作業のために研究室を貸してくださった先生方には感謝しきれないほど感謝しています。本当にありがとうございました。

*I could learn a lot of things from this project, and have done a lot during this first experience. I will hold memories of this time forever close to my heart. I think that my future will be happy, because I was deeply impressed by my experiences in the 7th International Participation Project. I would like to challenge new things more and more and I think that it will change my negative characteristics positive ones.*

*Thank you for the chance to meet friends in Indonesia . . . Saya suka Indonesia.*

### 家族とは温かいもの

「喜」：言葉は違ったけれども、指差し会話帳とボディランゲージを使うことで心をかよわすことができた。「縁」：毎日積極的に自分から接していくことで交流が深まり、本当の家族のように思えた。だから、お別れの日には自然と涙が出てきたし、もう一度近いうちに再会すると強く決意した。「伝」：指差し会話帳やボディランゲージを使って、日本の文化や流行しているもの、どのような動物がいるのかなど、「日本」を伝えることができた。「愛」：ホームステイ先で学んだのは、家族の大切さ。外が暗くなってきたらほぼ毎日、近所からみんなが集まり、その日あったことや、やったことを楽しそうに話し合っていた。日本の僕の家族では見ることのできない光景であったので、そこに家族の温かみを感じた。(井元)



## 参加することで得られたもの

前畑 友希  
(欧米 英米 1年)



「ボランティア」。それは私にとって小さい頃からの夢であり、本学を選んだのもボランティア活動が充実していてそこに魅力を感じたからです。1回生の時から参加しようと決めていた私は、今回それを実現することができました。

スマトラ沖地震で被害にあったところ、人びと。一言に「ボランティア」といっても、いろんな面でどうしていいのかわからない自分がありました。今回のプロジェクトでは防災教育が中心でした。何一つわからないインドネシア語をみんなで覚え、背景や小道具を作り、劇で避難の仕方について紹介したり、地震について説明するといった活動をしてきました。みんなでいつも反省会をし、明日には今日よりも良いものが披露できるように夜遅くまで取り組みました。みんなが何事にも真剣で、体調が悪くてもできる範囲で精一杯しようとしている人もいました。落ち込んだときにはお互いが励ましあい、また一緒に頑張っている人もいました。とても素晴らしいプロジェクトであり、参加できたことに誇りと喜びを感じました。また防災教育では、小学生を対象にしているので飽きられてしまったら駄目だと思い、キャラクターをいれたり、おもしろくしてみたり。みんな楽しそうに見てくれて、考えたクイズにも積極的に参加してくれていました。一生懸命、体をのりだしてまで聞こうとしてくれる子どもたちや、「うん、うん」とうなずきながら真剣に聞いてくれる先生方、そんな姿を見て毎回涙が出そうになるほど嬉しかったです。例え一つでもいい、一人でもいいから理解して、今度もし起きてしまったときには一人でも多くの人が救われたらいいなという気持ち、ただそれだけでした。助けてあげなければならない、どうすれば少しでも笑ってくれるだろうと考え、肩に力が入っていた時期もありましたが、その考えが一番大事なことではないのだなど、この体験を通してとても感じました。「相手の気持ちになって考える」、ただそれだけのことだけど、それが一番必要なことなのではないかと感じました。日常生活の中でも、友達が辛そうな顔をしていたら声をかける、電車でお年寄りがいたら席を譲るといった、その心がボランティアをする上で一番大切なのではないかと思います。

またニアス島ではホームステイになり、活動はほとんど昼までなので午後は家で過ごしたり、近所の子と散歩に行ったり、折り紙をしたり、歌を歌ったりしました。私のホームステイ先は小さい子がいなかったため、会話が基本のような毎日でした。インドネシア語が全くわからなくてご飯を食べるときも指差し会話帳を手離せませんでした。お母さんが、自分の伝えたいことが私に全然伝わらなくてイライラしているのもわかりました。いくら覚えた単語を言っても、二言目を返されるともう返事ができなくて会話にならない、とても申し訳なくてつらい毎日でした。そんな自分なのに、3兄弟のみんなは嫌な顔一つせず

に笑顔で楽しそうに会話帳を使って話かけてくれました。お母さんもいつも体調を気にかけてくれて、私が会話できなくて不安そうな顔を見ると背中をさすってくれて、「大丈夫だよ！」って言うてくれました。また、今でもたまに家に電話をかけてきてくれます。私はこの家族にホームステイさせてもらったからこそ、言葉がなくても感じる人の温かさを人一倍感じられたと思います。いきなり入ってきた外国人でも、みんなが笑顔で迎えてくれる、何の疑いもなく寄ってきてくれる。震災の跡なんて感じさせないほど、みんな前を向いて明るく生きていて、すでに「被害にあったかわいそうな子たち」ではありませんでした。逆に日本の子たちよりも生き生きして子どもらしく、小さい子たちからたくさんのかんことを、忘れかけていたようなことを学ばせてもらった気がします。

よくボランティアをした人がいう「日本はとても恵まれた国であることにもっと感謝しなければいけない」という言葉、今回の経験を通して身に染みて感じました。それと同時にこの経験を私たちだけの経験だけで終わらせたくないと思いました。たくさんの人にこんな国もあるということを知ってほしいし、自分を含めみんなが日本という国が恵まれた国であることに感謝していけたらなと思います。私はこのプロジェクトに参加させてもらえたおかげで、今までとは違うものの考え方や見方、また将来の自分に繋がるものを得られました。ボランティアがしたいという私にとってとてもいい第一歩になったと思います。

### たくさんの愛につつまれて

「喜」：全くと言っていいほどインドネシア語がわからない私はみんなが言っていることを理解できないことがすごく辛かったが、みんながいつも笑顔でたくさん話してくれた何よりの救いになり、とても嬉しかった。「縁」：私は子どもが大好き！インドネシアの子どもたちは、とても活発で、くっつくと離れないほど人懐っこい子たちばかりだった。「伝」：ホームステイ先の人とお別れの前夜、私は家族一人一人に手紙を渡した。その時みんなが喜んでくれて、笑顔で言ってくれた「ありがとう」の言葉が胸にしみ、一番嬉しくて泣きそうになった。あまり話す機会がなかったお父さんが、「次に来る時もうちに来てね」と言うてくれ、また子どもたちも「ゆきは僕たちの家族だよ」と言うてくれた。インドネシア語が分からなくてたくさん迷惑をかけてしまったのに、最後にそのような言葉を言ってもらえて本当に幸せに感じた。私はホームステイ先みんなが本当に大好き。その気持ちが少しでも届いていたらと思った。「愛」：ホームステイ先のお母さんが作ってくださったご飯は、本当にどれもおいしかった。私が「おいしい」と言うて嬉しそうな顔をしていた。そんなお母さんは、私が辛い顔をするてよく背中をさすてくれた。「大丈夫」と言いながら。そうしてくれることで本当に落ち着いたし、いつも肩に力はいっていたが、和らいだ。優しい心、相手を思う愛は言葉がなくても届くのだと感じた。(前掘)



# 記憶を書けない弁明

住原 則也

(地域文化研究センター長)



一引率スタッフとしてこのコーナーに書かせていただこうと、実は何度も書き始めながら、短い文章でしかないのに不思議と筆が進まなかった。どうしてだろうと、メダンやニマス島での活動記録や写真を眺め振り返ってみるが、ますます書けなくなってとうとう締切の日を過ぎてしまっていた。締切を過ぎて、少し開き直って冷静にそんな自分を観察してみると、実は、わずか2週間足らずの活動とはいえ、毎日が早朝から夜まで極めて濃密な記憶に残る日々であったために、おそらく頭脳も心も多すぎる印象深い記憶を処理・消化しきれておらず、まだ言葉になって出てくるには時間が足りないのでは…と、(書けない自分への自己暗示的弁明かも、という別の意識の声も聞きながら)思うようになった。

しかし冷静になった今でも、やはり筆が進まないのは、インドネシアの地で現地の子どもたちと交流する参加学生諸君の、大学の授業中ではあまり見られない光り輝く姿や、思い通りにパフォーマンスができず、期待するような反応が得られずもがきながらも、次のパフォーマンスには新たな工夫を凝らしてチャレンジしつづけようとする姿などを、どう第三者にも分かるよう適切に表現してよいものか分からないからだと思う。また今年は、科目等履修生としての社会人の方などの参加者もあり、同時にスタッフのような立場でも参加された。この方々の大人としての参加姿勢や臨機応変のご協力の場面も、あまりに多すぎて短い言葉で感謝の気持ちなど表現しきれない。センターの専任・兼任のスタッフもまた八面六臂の働きであり、この全貌もまた書ききれものではない。文字にしなければ伝わらない、文字にしても伝えられない。そんなジレンマを前にして、ますます筆は重くなる。

読者の皆さんには是非この記録文集を端から端まで読んでいただき、なおかつその何十倍もの書ききれない多くの思いがあること、行間から感じ取っていただきたい、と書くことが精一杯である。

( \*私の顔写真は学生が選んだものです。 )





## 身近な国際交流で心を暖かく

澤山 利広

(地域文化研究センター准教授)



インドネシアでの「国際参加プロジェクト」は、昨年引き続き2回目となりました。私は準備や引率などのために、ここ3年でインドネシアを8回訪れています。それまでのインドネシアのイメージは、リゾートとテロの両極端なもので、インドネシア人は皆、戒律に厳しいムスリムだろうと思っていました。

しかし、メダンでは日系、マレー系、華人の方々に助けられ、ニアスでは敬虔なキリスト教徒にお世話になりました。訪れるたびに人情の機微に触れ、インドネシアに対する愛着も増えています。「国際参加プロジェクト」は彼らの協力なしには成り立ちませんが、私が直接彼らに恩返しできる機会はそれほど多くはありません。せめてインドネシアから日本に来ている方々に何か役にお立てればと思っています。

2007年の10月のある夜、そのチャンスは訪れました。マレー系の男性と中華系の女性が大阪環状線の疎らな乗客の車中で路線図を見ながら下車するかどうかを議論しているようでした。“How may I help you?”と声をかけました。男性がホテルに戻りたいけど、どこで乗り換えるか分からないとのことでした。私も同じ方向なので宿泊先まで付き添うことになりました。インドネシアから池田市の自動車メーカーで研修を受けるために数日前に来日し、今日は休みを利用してUSJ(ユニバーサル・スタジオ・ジャパン)で遊んだ帰りだと、女性が話してくれました。街は清潔で人も親切との彼らの日本評でした。わずか20分の草の根交流でしたが、日本とインドネシアの経済交流を肌で感じる事ができ、1日をいい気分締めくくることができました。

インドネシア在留邦人は国別で16位の約1万人強、在日インドネシア人数は国別で9位の約2万5千人にのぼります。意外にそれぞれの国におけるシェアの大きいことが分かります。しかし、一般的な日本人にとって、インドネシアのイメージは、あまりはっきりしたものではないのではないのでしょうか。

我々に出来ることは海外に直接でかけることだけではなく、以外に身近な所にあるようです。ちょっとした親切で心が温かくなれば、それが国際交流が成功したサインです。インドネシアに赴いた参加者の皆さんが、内なる国際化にも目を向け、その担い手にもなってもらえれば嬉しい限りです。2008年は、日本とインドネシアの国交樹立50周年にあたる「日本インドネシア友好年」です。

# ニアスの子どもたちの心に 何が残ったか？

菅原 由美

(インドネシア語コース講師)



2004年12月26日にスマトラ沖で大地震・津波が発生して以来、インドネシアでは「地震」や「津波」という言葉がとても身近なものとなった。実際、これまででは考えられないほど頻繁に大きな地震が起きるようになった。3年前に地震や津波で破壊された町々は、海外からの援助を受けて、それまで以上の活気を取り戻しつつあるが、今なお各地で頻発する地震に対し、インドネシアはどのような対策を講じるつもりなのか、政府レベルでも民間レベルでも、地震に対する備えはまだほとんどできていないように見える。天理大学で2005年に始まったスマトラ沖地震津波被災地復興支援活動は、ニアス島に小学校を建設し、アチェの大学に図書を寄贈した。その関係で、ニアスにもアチェにも何度も足を運んだが、人々は次の地震のことより、生活の再建に余念がなかった。地震・津波についての教育は、徐々に始められているようであったが、避難教育は、思った以上に進んでいなかった。おそらく避難は練習するものという認識がないことが原因であろうと思われた。このことから、今回の「国際参加プロジェクト」で、日本の大学生ができる支援活動として、日本人であれば、子どものときから当たり前のように教えられている地震時の避難方法を、インドネシアの子どもたちにも教えてみるのはどうだろうかと考えた。すでに幾つかの大学の学生がおこなっている活動でもあり、経験談を聞くこともできた。

しかし、実際に始めてから、地震対策・避難訓練は各国の実情に合わせていかなければいけないものであり、「当たり前」のことではなかったことを知った。また、学生たちが子どもたちに受け入れやすいように工夫を凝らしている姿をみて、子どもたちを相手にするという難しさを実感した。さらに、現地では、私達教員は子どもたち相手ではなく、小学校の教師たちを相手に、私たちの活動趣旨を理解してもらい、協力してもらうために、格闘する日々であった。ニアスで天理大学の学生たちが活動するのは2年目であったにもかかわらず、まだ十分に活動の意図を理解してもらえていないことに、国際協力活動の難しさを感じた。私たちの方も現地社会の人間関係について、十分に理解していたとは言えず、そのためにさらに意思の疎通が難しくなっていた。

ただそのような怒涛の日々のなかで、学生たちが現地の子子どもたちやホスト・ファミリーと仲良く過ごしている姿を見て、交流は確実に進んでいることを感じた。学生たちの演技は日が経つにつれ上達し、熱心に見入るニアスの子どもたちがとてもかわいかった。改良すべき点はまだ散見されたが、それでも子どもたちを劇に引きつけたパワーには正直恐れ入った。最後に小学生の両親たちが「子どもたちが日本という国に興味を持ちだしたようだ」と感想を述べていたが、子どもたちの心に残った何かが、今後の彼らに何らかの意味を持ってほしいと期待しながら、ニアスを後にした。

# ふれあいを通して学ぶ

倉光 ミナ子

(地域文化研究センター講師)



本年度のプロジェクトに対する感想について学生のように答えることが許されるのであれば、「大変だったが、実りあるプロジェクトだったなあ」という一言が浮かんでくる。それはまず、アジア学科インドネシア語コースの海外文化実習との共催を目指したことと関連する。インドネシアで言語や文化を学ぶ文化実習と国際ボランティアを体験するプロジェクト・・・求められること、目指すこと、そしてそこに寄せる学生の期待も異なっていた。しかし、それらのある程度達成する過程において、インドネシア語コースの先生方との交流が深まったことはよい思い出となった。

次に、プロジェクトの大変さはインドネシア語による防災教育を主軸とした活動を行なったことから派生した。同じスマトラ沖大津波で多大な被害を受けたバンダ・アチュエではその後 NGO などにより防災教育が行なわれているのに対し、ニアス島ではそのような試みは見られなかった。そこから私たちの防災教育への挑戦が始まった。とはいえ、スタッフの誰も災害や防災の専門家ではない。そのような中で、京都大学の学生グループや本学出身の災害マネジメントの専門家の方を招いて、防災教育を教示していただいたり、天理小学校で模擬授業をさせていただいたりした。こうした活動を通して、学内だけに留まらない実りあるつながりが少しずつ構築されたことであろう。

今年のプロジェクトは確かに「大変だった」が、最も苦労したのは参加してくれた学生たちであろう。今年は昨年以上に、個性の強い学生たちが集まり、話したこともないインドネシア語で子どもたちに「地震・津波がなぜ起こるのか」、「地震がおきたらどうしたらよいのか」を教えるという活動に没頭した。後からきくと、防災教育の準備のときは時にはかなり激しい意見の応酬がなされたらしい。しかし、プロジェクトが終わるころには喜ばしいことだが、学生たちの中には明らかに学年や専攻を超えた絆が生まれたといえよう。何よりも、プロジェクトを通して、天理大学生が秘めている子どもたちと向かい合ったときに発揮されるパワーや情熱のすばらしさを改めて学ぶことができた。今年の学生の合言葉は「喜縁伝愛」であった。参加学生は間違いなくニアス島でのホームステイを通して、自分たちが防災教育として相手方に渡したものの以上の何かを受け取ってきた。新たにできた「縁を喜ぶ」姿は帰国後に専攻にも関わらず、インドネシア語を学んだりする学生たちの姿から感じることができるし、一生懸命インドネシア語でお礼状をしたための様子に「愛は伝わる」のではないかと期待している。今年のプロジェクトはまさに多くのふれあいの場を作り出し、そこから学生もスタッフも学びとることが多々あった。こうした「国際参加プロジェクト」の実施過程で出現するさまざまなふれあいは、確かに多くの結果をもたらしてくれると実感できたプロジェクトであった。

# 伝えることの大切さ

中田 翔子

(タイ・インドネシア語コース事務助手)



2004年12月26日に、スマトラ島沖大地震インド洋沖大津波が発生した時、私はまだインドネシア語コースの2回生だった。テレビから伝わってくる津波の規模があまりにも大きく、遠く日本にいた私も恐怖でいっぱいだった。大津波が発生した翌年8月には私は1年間留学をする為にインドネシアに旅立った。

留学中に私は、ある小学生の女の子と友達になった。彼女自身は何も語ってくれなかったが、彼女の叔母さんが私に彼女のことについて話してくれた。その子は大津波が発生した時、アチェの海岸近くに住んでいた。彼女の目の前で、家族全員が大津波にさらわれてしまい、そして彼女自身も津波にのみ込まれてしまった。しかし津波にさらわれたその瞬間に気絶したために流されていた間に水を飲んで溺れることもなく、ただ気絶して流されていたところを引き上げられたのだという。「大地震があった直後になぜ逃げなかったの?」と聞くと、「津波がくるなんて思ってもいなかった。近所の友達は、(津波が来る前兆で)水が引き上がった海で、魚がいっぱいとれると喜んで海に走って行った。その数分後に叫び声と津波の凄い音が聞こえた」と答えた。私はこの話を聞いたとき、とても悔しかった。その時、誰か一人でも海岸は危ないから離れて避難しろという人がいたなら犠牲者が減らせたかもしれないし、彼女の家族も助かったかもしれない。そう思うと悔しくてしかたがなかった。

その後、2006年に帰国して、「国際参加プロジェクト」のことを知った。今回の目的は、ニアス島の子どもたちに地震と津波についての知識を深めてもらい、避難の方法を教えるという内容だと知り、あの津波の時のような犠牲者がもう出ないように何か手伝いをしたいと思い、プロジェクトに参加させていただいた。ニアス島では、私たちなりに一生懸命考え、インドネシアのテレビでもなじみのあるドラえもんやピカチュウに変装して劇をしながらクイズも交えて生徒も参加する形で、地震と津波のことを理解してもらえるように努力した。しかし、言葉の壁もあり伝わったかどうか不安になった時もあった。ところがある日、地震後の避難の仕方について説明する劇のなかで、「地震の揺れが治まったら、まず、することは何ですか?」A.真っ先に教室の外へ逃げる”、“B.かばんで頭を守りながら、一列に並んで落ち着いて教室から出る”。どっちが正しいかな?というクイズがあった。それを聞いた生徒と先生たちは一斉に「Aが正解だ!!」と叫んだ。しかし、その後に天理大学の生徒たちが、Bが正解であることとその理由を説明すると、「お~そうか!!」と生徒も先生たちもみんな納得したようだった。この様子を見て、今回私たちが伝えたかったことがきちんと伝わっていると初めて実感した。地震と津波のしくみについては、まだ小学生には難しく、理解できないかもしれないが、テレビでドラえもんやピ

カチュウを見るたびに少しでもこの劇のことを思いだしてほしいと思う。そして、将来大きくなって理解できる時がきたら、ニアス島に地震や大津波を知らないこれから生まれてくる世代の子たちに、教えてあげてほしい。そして、もしニアス島で地震や津波が再び起こったときに、彼らが率先してみんなに避難の指示をして、犠牲者がゼロになればと願っている。

最後になりましたが、このプロジェクトに参加させていただけたことに感謝し、先生方や一般参加の方々、そして一緒に参加した生徒のみなさんにお礼を申し上げます。

### 喜縁伝愛？

ニアス島での活動中、私はモアウォ小学校の校長先生の家にお世話になった。モアウォ小学校でホストマザー（イブ）である校長先生のところへ挨拶に行くと笑顔で私を迎えてくれた。しかし、その後にちょっと学校でトラブルがあり、イブはとて不機嫌そうな顔をしていた。結局、学校から家に帰るまでずっと怒った感じで、みんなイブのことをとても怖がっていた。しかし私は、この家でホームステイができるのがとても嬉しかった。というのは、そのイブは、私の祖母に雰囲気がとてもよく似ていて、性格まで少し似ていたからである。ちょっとみんなからは嫌われるタイプの性格だが、実はとてもやさしい良い人だと、私はなんとなく分かっていた。おばあちゃん子の私はとても親しみ易く感じた。

家に着くと、イブは元通りの優しいお母さんに戻った。そして、私に一枚の紺のTシャツを見せてくれた。そのTシャツは今年の「国際参加プロジェクト」で、この家にホームステイをした子が置いていったTシャツだった。イブはそのTシャツを見ながら昨年ここにきた古橋賢君と福西穂高君の話を嬉しそうに話してくれた。彼らがいいた一週間はとてにぎやかで、インドネシア語ができなかった福西君も一生懸命に話かけてくれたこと、そしてインドネシア語コースの古橋君が彼の通訳をしてくれたことをイブは楽しそうに話してくれた。そして彼らが帰ってから連絡がないので、「賢は今なにをしているのか？穂高は元気なのか？」と心配そうにしていた。本当のお母さんのようだった。彼らとそのTシャツをイブに預けて帰ったのは、今後ニアスに来る天理大学の学生に彼らがここに来たということを語り継いでほしいからだといブは教えてくれた。

私は、このニアス島で家族や祖母似のイブに出会えたのは本当に縁だと感じた。この縁をずっと忘れずに大切にしたいし、忘れてほしくないと思った。だから私もこの「縁」を語り継いでもらうために、帰りに今年の「国際参加プロジェクト」のTシャツをイブに預けてきた。きっと来年もイブは、私たちの事を語り伝えてくれるだろう…。(中田)



## ニアスの地に芽生えた「絆」

高藤 洋子  
(現地活動スタッフ)



眼下に広がる椰子の樹々、茶色い屋根の家々、そして街並み…。 「一年振りのメダン、ニアスは変わったかしら？ モアウォ小学校の子どもたちは変わらず元気かしら？」等と期待に胸を膨らませながら、私は懐かしいメダンに降り立ちました。

在メダン日本国総領事公邸では、総領事をはじめ皆様より、温かい励ましのお言葉を頂戴致し大変感激しました。その後、スンゲイ・アイル・ヒドゥップ孤児院を訪れました私は、そこで初めて学生の皆様による防災教育を見学しました。子どもたちに人気の日本のキャラクターが登場するその防災教育劇、クイズは至るところに創意工夫がなされ、すばらしいものでした。この防災教育は、その後、北スマトラ大学やニアス島の小学校でも実施されましたが、回を重ねるごとに一段と見事なものに仕上がっていったように思います。

メダンの二つの大学では、日本語学科の方々との交流を行ないましたが、ソーラン節、空手などの日本文化に、皆様高い関心を示しておられました。学んでおられる日本語を使い、様々な問いかけをしてきて下さった学生さんお一人お一人の顔が目に浮かんできます。日本語で答え返すと、彼らは言葉の通じた喜びを体いっぱい表し、笑顔で嬉しそうに反応してくれました。その姿が忘れられません。感受性の高い時期に、この様な交流を経験し感動することは、両国の学生皆様にとって意義深いことだと思います。

ニアス島では防災教育の仕上げとして、最終日に全校生徒、先生方と共に避難訓練を行ないました。カバンを頭上に置き頭を守りながら、列を乱すことも無く校庭へ避難する子どもたちの様子を見て心打たれました。と同時に、3年前にこの様に避難する術を知っていたならば… その様な思いが頭を巡り胸が詰まりました。防災教育劇やクイズを一生懸命に行なった学生皆さんの姿と、それを熱心に聞き、学習している子どもたちの姿が重なり、今回の防災教育がもたらした意義の大きさを実感しました。

防災教育の他には、折り紙や絵、料理、空手、浴衣、歌など様々な日本文化の紹介を通して、交流することができました。殊にお別れ会では、汗だくになりながらお互いの国の料理を作り、交流を深めました。両国の料理が一つのランチ・ボックスになった時の感激が蘇ります。お別れ会前日に、コミュニティの皆様がご用意下さったカンテラの明かりで、夜遅くまで皆ひとつになつて準備をしたことも忘れられません。

皆が一緒に参加し、楽しみながら進めてゆくこれらの交流や防災教育は、その際の活発なやり取りが故に記憶に鮮明に残り、日本をもっと知りたい、或いは、防災知識をもっと学びたい、との思いを定着させたのでないでしょうか。その点においても今回のプロジェクトはメダンの大学をはじめ、ニアス島の人々に大きく貢献したように思います。

ブリヂストンの工場で見た、どこまでも続くゴム・プランテーションは、資源王国インドネシアならではの光景で圧巻でした。そこでは、各工程に於いての現場力が結集され、広大なプランテーションや工場が精緻に運営されておりました。トバ湖、サモシール島、プマタン・プルバ、ブラスタギでは、インドネシアの歴史、伝統、文化、大自然に浸ることができ、こちらもまたすばらしい経験でした。

私がプロジェクトで学んだことは、「他者への献身」の心と共に、「教育」の大切さでした。今回、モアウォ小学校創立以来初の防災教育が行なわれましたが、地震・津波の知識、対処方法を教わった子どもたちは、帰宅後それらの事を家族に話すことになり、そこで初めて家族皆がそれらの知識を得ることになりました。そしてさらに防災知識はコミュニティ全体に広がっていったのです。こうした過程を知った私は、学校がコミュニティに与える影響の大きさ、「教育」というものの大切さを身をもって感じました。

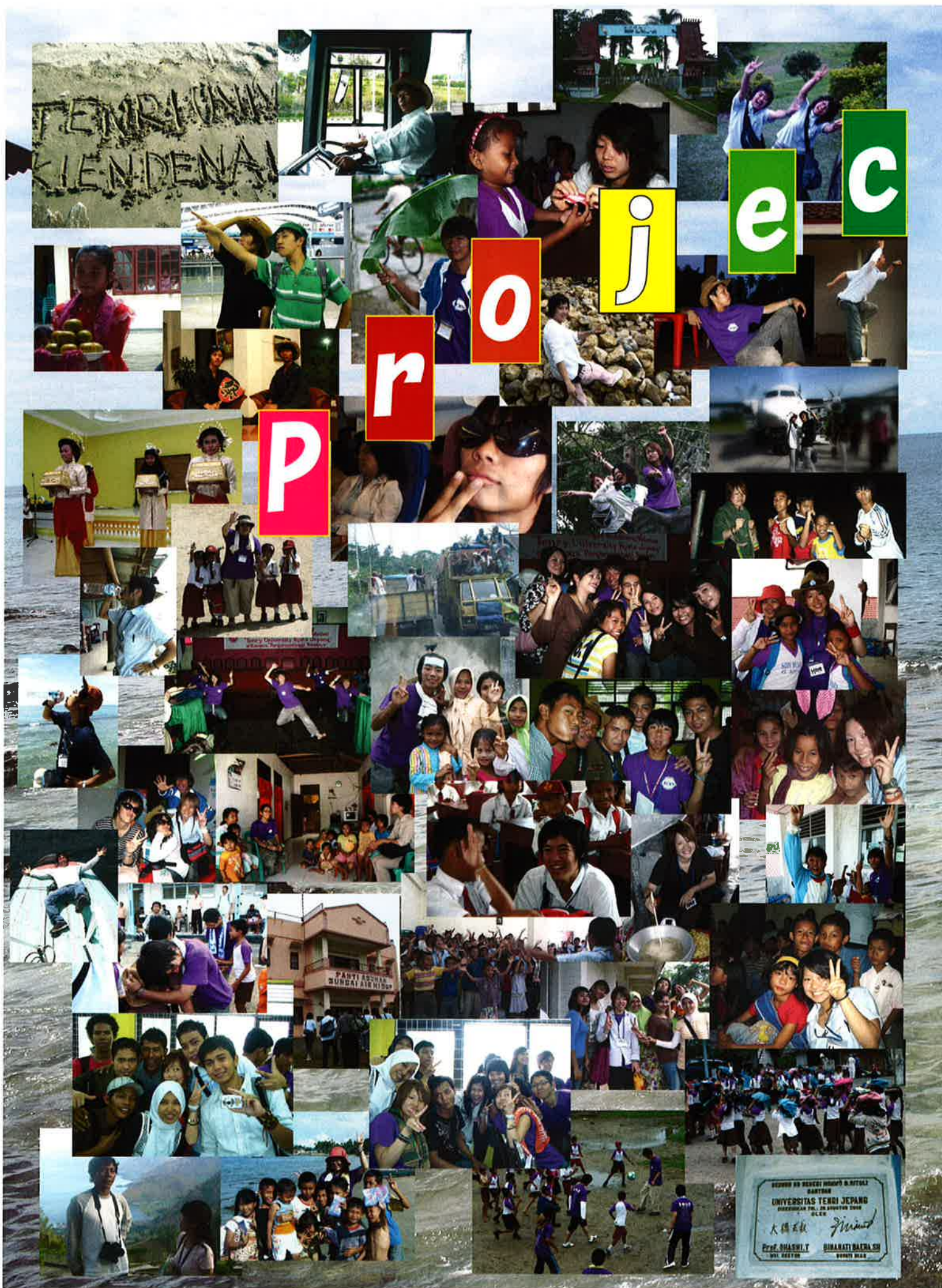
学生の皆様は一週間に亘るホームステイも本当によく頑張られたと感服しています。ホームステイ先のご家族やコミュニティの方々からもいろいろなお話を伺うことができましたが、多くの方々が、「天理大学の皆様は、この島に明るさと楽しさをもたらして下さいました」とのことをおっしゃっておられました。それらのお言葉に、ニアス島でのプロジェクトが確固たる基盤に載ったように感じました。

昨年、ニアスの地に蒔かれた「絆」の種は、確かに芽生え、成長していることを肌で感じました。これから先、さらに大きく花開き育てゆくことと思います。

最後になりましたが、今年もこのプロジェクトにご一緒させていただけました事に深く感謝致しますと共に、天理大学のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

第Ⅲ部  
《資料編》





TERMINAL  
KIENDENAI

P

r

o

j

e

c

PABTISSIA  
MUNDAL AIR NISIA

REKORAN DAN BUKTI HIMPUNAN BUKTILAL  
GANTIAN  
UNIVERSITAS TERMI JEPANG  
DIREKSIJARAN NO. 28 APRIL 2008  
0526  
大橋 正史  
Prof. SHAWA YU  
MIL. KERTEN  
SHINATI BACRA SU  
BUNNY BLAZ



L

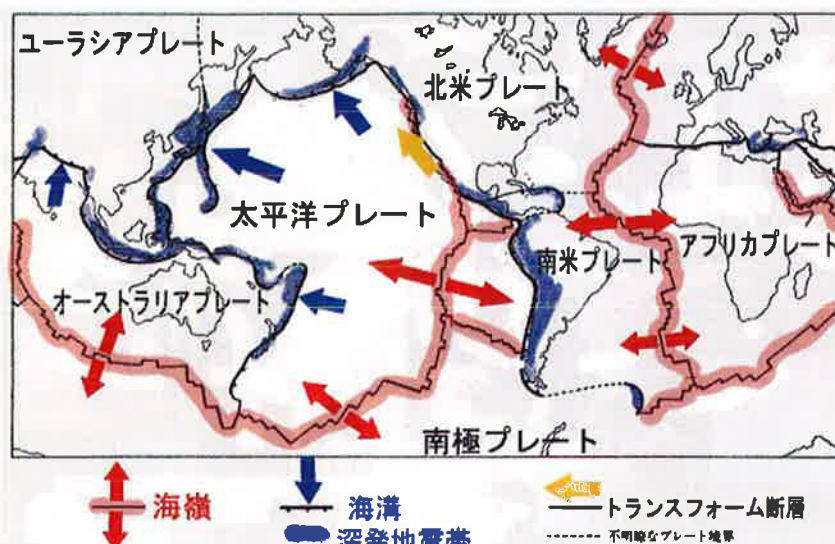
L

f

e



# 【インドネシアと地震】



(↑上図： <http://georoom.hp.infoseek.co.jp/rightindex.htm> から引用)

インドネシア周辺には、ユーラシアプレート、オーストラリアプレート、太平洋プレート、そして、フィリピン海プレートなどのたくさんのプレートが存在し、これらのプレートが環太平洋火山帯（環太平洋造山帯）の一部を構成しています。そのために、インドネシアは地震がおりやすい国といえますが、特に2004年12月26日のスマトラ沖大地震発生以降、前にも増して地震が起きる頻度が高くなっています。スマトラ沖大地震は、ミャンマーから大スンダ列島、小スンダ列島、ティモール島にかけて、インド・オーストラリアプレートとユーラシアプレートがぶつかり合う「スンダ海溝（ジャワ海溝）」が引き起こしたとみられています。スンダ海溝は世界有数の地震多発地帯で、この地域では100～150年の周期で地震を繰り返しています。スマトラ沖大地震以降、インドネシアで地震が起きる頻度が高くなっている理由としては、スマトラ沖大地震によりスンダ海溝が1000km超にもわたる巨大な範囲でずれをおこし、一気にマグニチュード9を超えるエネルギーが解放された影響で、周辺のユーラシアプレートにかかる力が大きく変わり、たくさんの地震を誘発させていると考えられています。

表：主なインドネシアの地震

地震発生日	地震名	規模	補足説明
1996年 2月17日	ニューギニア島沖地震	M8.2	死者・行方不明者 150人
2000年 6月4日	スマトラ沖地震	M7.9	死者 58人
2004年 12月26日	スマトラ沖大地震	M9.3	海岸地域に大規模な津波被害 死者・行方不明者約 30万人
2005年 3月28日	スマトラ沖地震	M8.7	震源地に近いニース島などで 1,000～2,000人が死亡
2006年 5月27日	ジャワ島中部地震	M6.2	死者 5,000人以上
2006年 7月17日	ジャワ島南西沖地震	M7.7	死者 500人以上
2007年 9月12日	スマトラ沖地震	M8.4	翌朝 M7.8の余震

## 【喜縁伝愛とは？】

「喜縁伝愛」という言葉は、みんなで1つの目標をもって共に活動できるように考えた造語です。「喜」「縁」「伝」「愛」の漢字1つ1つには次のような想いがあります。まず、現地の人たちを喜ばせ、自分たちも喜びたいという想いが「喜」。私たちが、このプロジェクトに参加し、メンバーや先生方、現地でお世話になる方々や子どもたちと出会えるのは縁があるからという想いが「縁」。地震や津波から身を守るための防災の知識や日本の文化を伝えに行くという想いが「伝」。現地の人たちと私たちが防災教育やホームステイを通してふれあい、思いやることで生まれる愛を大切にしたいという想いが「愛」。こういった4つの想いから漢字が選ばれて、組み替えると、「縁を喜び愛を伝える」という意味ももたせることができましたので、「喜縁伝愛」という合言葉ができあがりました。

# Tenri Univ.



# ICRS

そして...

縁を喜んで

愛を伝えあった

# 【発見伝 in インドネシア】

日本とインドネシアを比べると、いろいろな違いがある。また、日本の中でも地域ごとに見られる違いはインドネシアでも同じであった。プロジェクトを通じて、実際にさまざまな文化の違いを体験することができ、たくさんの発見があった。その一部をまとめてみた。

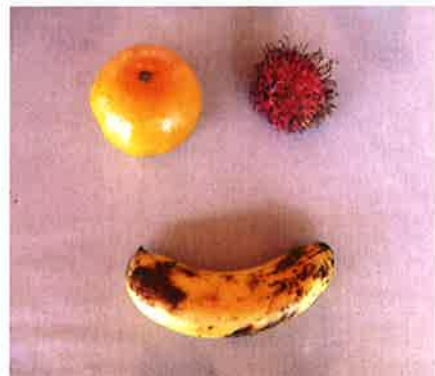
## ○人間、食は欠かせず…やっぱし発見が多かった食事の発見☆

インドネシアは屋台がいっぱい。しかも、おいしい!!! 自転車のアイス屋とかもあった。そして、インドネシアの料理は基本的に辛い。そんな辛さを和らげる食後のフルーツは本当に美味しい!! まず、天理大学国際文化学部のインドネシア語の学科会の名前にもなっているドリアン。ドリアン独特の臭いを放ち、別名フルーツの王様ともいわれているが、その味に関しては「おいしいからもっと食べたかった」という人と「あれはもう食べたくない」という人に分かれた。

インドネシアは本当にフルーツが豊富で、いたる所にココナツやマンゴーなどの日本では見ることのできない果物の木が生えていた。ホームステイ先の庭にスターフルーツの木がある家もあった。ドリアンやココナツの木は高さが数メートルあるために、我々の中にもそれらの木に登ろうとした人が少なからずいたようだ。しかし、怪我をする恐れがあるので、ニアス島の人たちは決して軽はずみな気持ちで木登りをさせたりしなかった。また、ココナツの木の殻を利用して、日本の竹馬のような遊び道具を作っていた。それは、パランスがとりにくくて使いこなすまで結構苦戦した。使いこなせるようになると、大学生でも楽しめた。

ニアスの料理に関する発見もあった。ココナツ味のおかゆがあった家もあったようだ。ココナツは多彩に料理として使えるし、すでに述べたように遊び道具としても使用できる。いわば、地球に優しい食べ物とでもいうのだろうか。日本では感じるできない経験であると思う。また、ホームステイ先によっては家畜を飼っている家もあり、その豚を使って料理を作ってくださったところもあった。私たちの普段の生活で、そのようなことはほぼ体験できないだろう。そこが異文化体験のメリットでもあるように思う。また、ニアスを去る前日に行ったお別れ会で、ホームステイ先の家族にカレーを作ってあげたときに分かったことだが、なんと、カレーの具では定番の玉ねぎがニアスでは高価であるようだ。このようなことを経験することで、食材へのありがたみや大切さを改めて認識した。

トバ湖への旅でも食べ物に関する発見はあった。チョコなどの成分になるカカオの中身は白くて甘いということである。ブラスタギのシナブンホテルに宿泊しているときに、バスに揺られて30分ほどかけて行ったパイナップル園では、そこを経営しておられるおばさんが無言で園内のパイナップルを切り出して来てく



れて、私たちにご馳走してくださった。そのパイナップルは、日本では味わうことができないくらい、とても、とても甘くて美味しかった。あの味は忘れることができない。

## ○いろいろな驚きばかりの生活の発見☆

ニアス島にはお風呂がない。しかし、マンディイといって水浴びの時間はある。日本では浴槽に入るお風呂が当然であるが、外国のホテルなどに泊まるとシャワーだけだったりする。それでも、シャワーからお湯が出るならだいぶマシな方だ。しかしニアスのマンディイは…まず、水槽のような、コンクリートでできた水を溜める場（左下写真参照）があり、そこから洗面器などで水を汲んで石鹸を泡立てて、髪も体も顔も洗い、さっきの水で洗い流す。要するに水浴びだ。それが全てである…。家によっては夕方に1回だけの家もあったが、朝と夕方だけの人や何回も入る人もいた。もちろん温かいお湯は出ないし、そんなものは一切無い。私たちのホームステイ中のニアスの朝は少し涼しく、朝のマンディイは体が震えるほど寒かった。夕方の5～6時以降は暗いし、寒いのでマンディイをすることを禁止されている家もあったが、9時に入った人もいて大丈夫だったそうだ。マンディイが好きな人もいたし、少し苦手な人もいた。ホームステイ先によってはその水槽みたいなところの中に小魚がいたそうである…。



ニアスのトイレは日本でいうところの和式便所のようなものと考えてもらいたい。ただ、水を流すときはマンディイのときと同じように水を汲んで便を流すという簡単な仕組みだ。このときの私たちのマナーであったのはティッシュを流してはいけないということ。だから、私たちは各自でゴミ袋にティッシュを捨てて処理していた。ゴミ

に関していうと、ニアスだけではないが、ゴミ箱がほとんどないので、そこら中にゴミを投げ捨てたり、小さなゴミであるなら、家から庭に直接捨てたりもしていた。海に目をやるとドリアン（Dorian）の殻がいっぱい浮かんでいた。

その他、ニアス語という現地の人たちの言葉があること、冷蔵庫がないこと、どこの家も玄関が大きく、玄関前や部屋の中にプラスチックの椅子がたくさんあり、ご近所さんたちが集まって、お喋りを毎日といっていいほどしていることなどに驚いた。どうもインドネシア人はお喋りが大好きらしい。そのようなことから想像できることだが、インドネシア人はあまり時間を気にしないようだ。別の言い方をすると、日本人みたいに毎日忙しそうにしておらず、スローライフを送っているといえる。どこかに生きる喜びを忘れ、生活と蓄えに追われる日本人と、生きることに必死ながらも家族やご近所とのお喋り時間を大切にし、最低限度の生活ができたらいいだろうというような考えによって暮らすインドネシア人… どちらか幸せなのかは本当に分からない。

## 【折り鶴】

現地活動スタッフの高藤さんが、インドネシア語での折り鶴の折り方を作ってくれました。学生たちはそれぞれのホームステイ先に持って帰り、鶴を折りプレゼントしました。

Cara membuat burung jenjang dari kertas

Burung yang membawa kebahagiaan dan keberuntungan

(1) Lipat kertas menjadi dua bagian

sehingga membentuk segitiga. Setelah itu lipat sekali lagi.



(2) Buka salah satu kantong, lalu lipat bagian tersebut sehingga membentuk bujur sangkar.



(3) Balik kertas, kemudian lakukan hal yang sama.



(4) Dengan bagian yang terbuka menghadap ke bawah, bentuklah garis segitiga sama kaki terbalik dengan melipat sisi kertas ke arah dalam. Lalu buka kembali.



(5) Dengan memanfaatkan garis bantuan yang baru saja dibuat, tariklah ujung bawah kertas ke atas sehingga membentuk belah ketupat, lalu lakukan pada sisi yang satunya lagi.



(6) Lipat kembali kedua sisi kiri dan kanan bawah ke arah dalam, sehingga kedua ujungnya

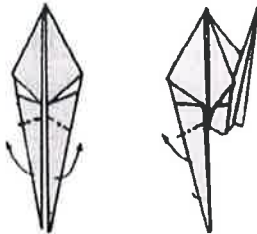


bertemu di tengah.

(7) Lalu lakukan pada sisi yang satunya lagi.



(8) Lipatlah sisi kiri dan kanan bawah ke arah atas sehingga membentuk leher dan ekor burung.



(9) Lipatlah salah satu ujung ke arah luar sehingga membentuk paruh burung.



(10) Tariklah sisi depan dan belakang lipatan ke arah luar, sehingga badannya mengembang.

Selesai!



Banyak orang Jepang membuat seribu burung jenjang dari kertas sambil mendoakan kesehatan dan kebahagiaan bagi diri sendiri dan keluarga, sekaligus mendoakan perdamaian untuk selama-lamanya di muka bumi.

YOKO TAKAFUJI

\*高藤さん、本当にありがとうございました。



# 【インドネシア語 一覧表】

## 【挨拶】

おはようございます	Selamat pagi
こんにちは	Selamat siang
こんばんは	Selamat malam
おやすみなさい	Selamat tidur
お元気ですか？	Apa kabar?
元気です	Baik-baik saja
すみません	Permisi
ありがとう	Terima kasih
どういたしまして	Sama-sama
ごめんなさい	Minta maaf
大丈夫です	Tidak apa-apa
また会いましょう	Sampai jumpa
バイバイ	Daag

## 【家】

家	rumah
お父さん	bapak
お母さん	ibu
弟・妹	adik
兄・姉	kakak
おばあちゃん	nenek
おじいちゃん	kakek
水浴び	mandi
眠る	tidur
食べる	makan
飲む	minum
とてもおいしい	enak sekali
おなかがすいた	lapar
おなかがいっぱい	sudah kenyang
おかわり	tambah
辛い	pedas
甘い	manis
散歩	jalan-jalan

## 【学校】

学校	sekolah
先生	guru
学生	mahasiswa
生徒	murid
友達	teman
ボール遊び	main bola
頭が良い	pintar
暑い	panas
寒い	dingin
～できる	bisa
～できない	tidak bisa
気をつけて	hati-hati

## 【自己紹介】

私の名前は～	Nama saya ~
私の年は～	Umur saya~
日本から来ました	Dari Jepang
私は学生です	Saya mahasiswa

# 【ニアス語 一覧表】

## 【挨拶】

こんにちは	ya'ahowu
ありがとう	saohagōlō

## 【家】

家	omo
私	ya'o
私たち	ya'ira
水浴び	mondl'n
眠る	mōrō
夢	mangifi
起きる	maoso
座る	dadao
食べる	manga
飲む	ubadu
ご飯	fakhe
水	idanō
魚	ia
おいしい	ami
臭い	aibōu
散歩	manōrō-nōrō
行く	mofano
学校に行く	mōi bazekola
ついて行く	moi/fao

## 【問いかけ】

どうして？	hana
なに？	hadia
いくつ？	ha'uga mboli
どこから？	hezo moroi
どこ？	hezoso

## 【学校】

学校	zekola
笑う	maigi
泣く	me'e
待って	base'ō sabata
いいよ	tola
帰る	mangawnhi
危ない	mosikhō
親切	ranmat
終わり	ahori
明日	mahemola
昨日	manewi
いいえ	lō'ō

## 【数字】

1	sara
2	dua
3	tōlu
4	efa
5	lima
6	ōnō
7	fitu
8	walu
9	siwa
10	fulu

# 【第7回「国際参加プロジェクト」に関する新聞記事】

前年度と同じく様々なメディアで「国際参加プロジェクト」に関する記事が紹介されました。日本の小学校での模擬授業などをはじめ、国内での活動の内容を事細かに記載してくれました。また、8月のインドネシアでの現地活動の様子は、現地の新聞にも記事が掲載されました。

ここに2008年1月9日現在における、本プロジェクトに関する新聞記事等の一覧表と記事の一部を紹介します。

【新聞記事等の一覧表】

No.	タイトル	記載紙	記載日
1	地震防災啓発劇 天理小で披露	読賣新聞	6月28日
2	さまざまな工夫を凝らしていました	布留らのNo.34	6月30日
3	天大生の防災授業 地震時に避難法勉強	天理小学校 毎日新聞	7月3日
4	Mahasiswa Jepang Kunjungi Swadaya (日本の学生スワダヤ大学を訪問)	SUMUT POS (スマトラポスト紙)	7月25日
5	東南アジア研究特別講義	天理大学広報	8月1日
6	根付いて 避難訓練	奈良新聞	8月15日
7	被災地の子供たちに防災教育	天理時報	9月30日

## 被災地の子供たちに防災教育



インドネシアでは、災害発生時の対処法などを身ぶり手ぶりで子供たちに教えた



フィリピンの子供たちにリコーダーをプレゼント

**地震・津波被害相次ぐ  
インドネシアの島で  
天理大「国際参加プロジェクト」**

このプロジェクトは、天理大が標榜する「他者への献身」を、国際的な場で実践する教育プログラムとして6年前スタート。これまでにインド、中国、フィリピンへ、被災地の目撃者や支援や国際交流等の諸活動を展開してきた。昨年は、国際文化学部アジア学科と連携して、2年続いた津波と被災地を訪問した。

1千人以上の犠牲者が出たインドネシア・ニラス島を訪問。現地の小学校に校舎を寄贈するなどの支援を行った。ニラス島での継続的な支援を担う同プロジェクトは今回、島内の小学校での防災教育を企画。学生たちは、災害マシンの専門家を講師として、天理大の協力によってのNGOなどの協力を得、約2カ月間を通過した。1回の事前研修を受け、7月21日に日本発った。行は、24日にニラス島へ。昨年、校舎を寄贈した生アウオ小学校を訪問。児童に地震や津波などの災害発生時のマシンの説明。劇クイズを通して災害発生時の対処方法を教えたほか、避難訓練も行った。

「被災から半年、島民は地震や津波を懐かしげに忘れてしまおうとしていた。しかし、天理大学の皆さんの取り組みを通して、またいっそうかたまりない災害から身を守るには、子供たちに防災の知識をしっかりと身につけさせることが重要だと気づいた」と述べ、感謝を表した。

一行はその後、島内の別の小学校でも同様の防災教育を行った。また、これに先立つ22、23の両日は、昨年に行きつけのニラス市の日本総領事公邸を訪問したほか、市内の教育機関や福祉施設を訪れた。

◇ 8月18日から20日にかけて、第8回の同プロジェクトの一行16人がフィリピンへ。サンタロサ市内の小学校で児童にリコーダーを贈った。

# 地震時の避難法勉強

クイズを交えて楽しく防災について学ぶ天理小の児童



## 劇やクイズを織り交ぜて

天理

地震について学ぶ防災教育が、天理市杣之内町の天理小学校（後藤典郎校長）であった。

天理大の学生らが劇やクイズを織り交せて分かりやすく地震時の避難方法や津波のメカニズムなどについて1年、4年のそれぞれ1クラス計66人の児童に話をした。

劇の台間に出されるクイズに同小1年の石塚浩輔君（7）は「クイズが楽しかった。地震が起きたら火を消します」と話した。学生たちは天理天地域文化研究センターの「国際参加プロジェクト」の二団として今夏、インドネシアを訪問する。

【宮間俊樹】

天理大の学生ら

毎日新聞 7/3

## 編集後記

●編集長（文章担当） 西峰葉子：報告書を作成しながら、自分は編集長だということを頭におき、誰よりも報告書のことを考えていなければと考えていましたが、至らぬ者でこの報告書は、ほんとうに多くの方の力をお借りして完成することができました。監修の倉光先生を始め、写真のデザインを手がけて下さった宮島さん、大黒柱として編集してくれた石田君、ほんとうに最後までありがとうございました。この報告書をお手にとってご覧下さった方、何か少しでも心に感じ取って頂くものがあれば、たいへん嬉しく思います。

●編集長（PC担当） 石田賢人：この世に「終わり」という言葉はないのか？一向にゴールは見えず、ゴールに着いたと思ったらまた離れていく。その内に執着心が起こり、こだわりを持つと終着点はどんどん遠くなる。10月頃に感想文を集めてから約5ヶ月…ようやく完成。長かった、そして、疲れた。初めはメンバーがとても个性的で楽しくなると思っていたが、実際は人により注目する事柄や文の構成などが十人十色、ここまで文章が違うものかとしみじみ感じている。また、予期しない「In Design」の導入など来年はもう少し計画性をもって取り組んでいただきたい。しかし、最も感じたのは「一人では何もできない」ということだ。写真の加工をして下さった宮島さん、その写真を撮って下さったアミジョーさん、パソコンの独占使用を許してくれたフィリピン組の皆さん、ご寄稿して下さいました先生方、サポートして下さいました牧山さん、貴重な資料を送って下さった高藤さん、貴重な意見を下さった戸田先生、そして、全ての悩みの壁に当たったとき、壁をぶち抜いて下さった倉光先生、ご協力して下さいました全ての皆様、お疲れ様でした。そして、ありがとうございました。最後に、何よりこの報告書の始まりとなったプロジェクトでの全ての出会いに感謝します。

●監修 倉光ミナ子：やっと今年のプロジェクトも報告書発行までたどりつくことができました。昨年の反省から、今年は予め日程に合わせて記録の担当を決め、現地で活動の際に細かくメモをとっている学生たちをみては「今年は楽勝かな」と一人ほほ笑んでおりましたが、そうは問屋がおろしませんでした。報告書の作成には大変な労力と時間がかかることを改めて認識しました。何よりも学生たちのこだわりと個性を生かした紙面づくりと、公に対する活動報告書づくりは簡単に両立できることではありません。常に暗雲立ち込める報告書の舵取りをいかに成し遂げるのかという個人的な課題は来年に繰り越させていただくとして、まずは新しく導入した編集ソフト「In Design」を見事なまでに使いこなしてくれた1回生の石田君の健闘に本当に感謝したいと思います。それから誰もが二の足を踏む編集長を引き受けてくれた3回生の西峰さんもお苦労さまでした。そして、何よりも本報告書の作成にあたり、ご寄稿・ご協力くださった皆々様に厚く御礼申し上げます。

**天理大学「国際参加プロジェクト」  
『第7回「国際参加プロジェクト(インドネシア)」報告書』**

発行：2008年3月26日発行

編集：石田 賢人・西峰 葉子

監修：倉光 ミナ子

発行所：天理大学地域文化研究センター

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

Tel/Fax：0743 (63) 9007

印刷所：天理時報社

**ICRS**  
**Tenri Univ.**